

2017 年度 修士論文

アメリカ女子サッカーの発展にノースカロライナ大学が
与えた影響に関する研究

The Influence of the University of North Carolina Women's
Soccer on the Development of Soccer in America

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻

トップスポーツマネジメントコース

5 0 1 7 A 3 0 5 - 1

上野 直彦

Naohiko Ueno

研究指導教員： 平田 竹男 教授

目次

第1章	序論	1
第1節	研究背景	1
第1項	アメリカの大学女子サッカーの活躍	1
第2項	ノースカロライナ大学女子サッカー部出身選手の活躍	3
第3項	アメリカ大学スポーツにおける3つの組織とディビジョン制	5
第4項	NCAA とカンファレンス制度の仕組み	7
第5項	NCAA とアスレチック・デパートメントの存在と役割	9
第6項	NCAA のシーズン制とトレーニング規定	10
第7項	アメリカ女子サッカーの中高生年代の変遷	11
第8項	世界の女子サッカーの歴史と新興国アメリカ	12
第2節	先行研究のまとめ	14
第3節	研究目的	14
第2章	研究手法	15
第1節	インタビュー調査及び公開情報をもとにした文献調査	15
第3章	研究結果	16
第1節	ノースカロライナ大女子サッカー部の変遷	16
第2節	NCAA 女子サッカー・チャンピオンシップの変遷	25
第3節	NCAA 大学コーチと選手及び日本人関係者インタビュー	28
第4章	考察	40
第1節	NCAA 女子サッカーの競技力向上への影響	40
第2節	NCAA チャンピオンシップ運営への影響	42
第3節	アメリカ女子サッカーの育成年代への影響	43
第4節	NCAA 大学女子サッカーの取組みとノースカロライナ大	44
第5節	TitleIXの女子サッカーへの影響と今後の課題	45
第5章	結論	47
第6章	参考文献	48
第7章	謝辞	49
付録	NCAA 大学女子サッカー関係者への質問表	50

【図表目次】

図 3-1 NCAA・ディビジョンⅠ・女子サッカーのチーム数の推移	20
図 3-2 NCAA・ディビジョンⅠ・女子サッカー選手の登録者数の推移	21
図 3-3 NCAA ディビジョンⅠ・女子サッカーのチーム割合の推移	21
図 3-4 NCAA ディビジョンⅡ・女子サッカーのチーム数の推移	22
図 3-5 NCAA ディビジョンⅡ・女子サッカーの登録選手数の推移	22
図 3-6 NCAA ディビジョンⅡ・女子サッカーのチーム割合の推移	23
図 3-7 NCAA ディビジョンⅢ・女子サッカーのチーム数の推移	23
図 3-8 NCAA ディビジョンⅢ・女子サッカーの登録選手数の推移	24
図 3-9 NCAA ディビジョンⅢ・女子サッカーのチーム割合の推移	25
図 3-10 NCAA 女子サッカー・チャンピオンシップのトーナメント表	26
図 4-1 NCAA 全ディビジョンにおける女子サッカーの選手登録数の変遷	40
図 4-2 NCAA チャンピオンシップ開催による好循環	42
図 4-3 NCAA 大学全スポーツのチーム増加数と休部数(1972 年から 2016 年まで)	46
表 1-1 過去の夏季五輪 6 大会における女子サッカーの結果	2
表 1-2 過去のサッカー女子 W 杯 7 大会における結果	2
表 1-3 FIFA 女子 W 杯カナダにおけるアメリカ代表登録選手の出身大学別一覧	3
表 1-4 過去の五輪全大会におけるアメリカ代表登録選手の出身大学別一覧	4
表 1-5 過去の W 杯全体会におけるアメリカ代表登録選手の出身大学別一覧	4
表 1-6 NCAA の各ディビジョン加盟校数と特徴(2016 年 12 月末)	5
表 1-7 NCAA 女子サッカーの 32 のカンファレンス一覧	7
表 1-8 ACC のカンファレンス構成大学の一覧(2017 年度)	8
表 1-9 NCAA スポーツのシーズン制における期間	10
表 1-10 全米高校サッカーにおける男女登録者数の変遷(1972 年～2016 年)	11
表 3-1 ノースカロライナ大・女子サッカー部についての現状(2017 年シーズン)	16
表 3-2 NCAA 全ディビジョンにおける女子サッカーの選手登録数の変遷	18
表 3-3 2017 年 NCAA 女子サッカーのチャンピオンシップ日程表	26
表 3-4 NCAA 女子サッカー・チャンピオンシップ優勝回数	27
表 4-1 NCAA 女子サッカー・全ディビジョンの統計	41

第1章 序論

第1節 研究背景

アメリカは女子サッカーの強豪国として知られている。現在はプロリーグも存在し、その選手がアメリカ代表に選出されているが、2015年女子ワールドカップ(以下、W杯)では登録23名全員が大学サッカー出身者であった。また、自国開催の1996年アトランタ五輪と1999年女子W杯とともに優勝を果たしたが、代表選手の多くが大学スポーツ出身だった。しかしながら1970年代初頭、NCAA(全米大学体育協会)における女子サッカー選手が大学スポーツの競技者数に占める割合は約2%に過ぎなかった。

石山(2008)によると「TitleIX」が制定されてから、アメリカの多くの大学が女子サッカーチームを創設し、プレー環境は世界的にみて充実しており、大学サッカーがアメリカ代表選手への供給元になったと述べている。また同論文での羽石架苗氏(マウント・ホーリーヨーク大学女子サッカー部監督)へのヒアリング調査によると、女子サッカーはアメリカの中流階級以上の特に白人社会の少女たちに人気があり、女子サッカー選手は少女たちの憧れだった。また当時、少女たちの競技選択において、バスケットボール以外では女子種目があまりなく、多くの場合サッカーが選ばれるという現状もあったと述べている。

そんななか1982年に第一回NCAA女子サッカーのチャンピオンシップ(全米選手権)が開催され、ノースカロライナ大が優勝、その後21回の優勝という快挙を果たし、多くのアメリカ代表選手を育成している。同大学の活動を調査することがアメリカ女子サッカー全体の発展や大学スポーツが与えた影響を分析することになると考えられる。特にNCAA女子サッカーの競技力アップ、またチャンピオンシップの運営にどのような影響を与えたかを調査する。

第1項 アメリカの大学女子サッカーの活躍

サッカーの各国レベルを評価する指標の一つとしてFIFAランキングがあるが、アメリカ女子代表は現在FIFAランク1位、日本女子代表は8位(2017.9.1.FIFA発表)である。そのアメリカ代表と日本代表が直近の国際大会において対戦したのはカナダでの2015年FIFA女子ワールドカップ(以下、W杯)の決勝戦だが、アメリカは優勝を果たしランキング1位となった。そして同年、アメリカ女子代表はU-20とU-17のW杯でも優勝し、FIFA主催のすべてのカテゴリーの女子W杯を制覇するという快挙を果たし、ランキングだけでなく名実ともに女子サッカー大国となった。

だが、サッカー女子アメリカ代表の躍進は今に始まったわけでない。表1-1は夏季オリ

ンピック(以下、五輪)の過去全6大会の女子サッカーの結果一覧であるが、アメリカはすべての大会に出場を果たしており、金メダル4回・銀メダル1回を獲得して過去の出場国になかでも最大数のメダルを獲得していた。

表 1-1 過去の夏季五輪6大会における女子サッカーの結果

開催年	開催地	優勝	準優勝	3位	出場国数
1996年	アトランタ	アメリカ	中国	ノルウェー	8
2000年	シドニー	ノルウェー	アメリカ	ドイツ	8
2004年	アテネ	アメリカ	ブラジル	ドイツ	10
2008年	北京	アメリカ	ブラジル	ドイツ	12
2012年	ロンドン	アメリカ	日本	カナダ	12
2016年	リオデジャネイロ	ドイツ	スウェーデン	カナダ	12

さらに表 1-2 で示したが、女子サッカーW杯における過去の全7大会すべての結果があるが、アメリカ女子代表は1991年中国大会から2015年リオデジャネイロ大会までの全7回すべてに出場、過去3回の優勝を達成している。五輪・W杯のすべての大会に出場し、両大会において優勝を経験している国は、世界で唯一アメリカだけであった。

表 1-2 過去のサッカー女子W杯7大会における結果

開催年	開催国	優勝	結果	準優勝	3位	4位	出場国数
1991年	中国	アメリカ	2-1	ノルウェー	スウェーデン	ドイツ	12
1995年	スウェーデン	ノルウェー	2-0	ドイツ	アメリカ	中国	12
1999年	アメリカ	アメリカ	0-0 (PK 5-4)	中国	ブラジル	ノルウェー	16
2003年	アメリカ	ドイツ	2-1 (GG)	スウェーデン	アメリカ	カナダ	16
2007年	中国	ドイツ	2-0	ブラジル	アメリカ	ノルウェー	16
2011年	ドイツ	日本	2-2 (PK 3-1)	アメリカ	スウェーデン	フランス	16
2015年	カナダ	アメリカ	5-2	日本	イングランド	ドイツ	24

そのアメリカにおいてカレッジスポーツが盛んなのは有名だが、表 1-3 で示したが2015年 FIFA 女子W杯カナダにおいてアメリカ女子代表の登録選手23名全員が大学スポーツ出身者であることがわかった。また、全員が大学時代にNCAA(全米大学体育協会)が主催するチャンピオンシップへの出場経験があることもわかった。

表 1-3 FIFA 女子 W 杯カナダにおけるアメリカ代表登録選手の出身大学別一覧

	選手名	年齢	出身大学	現所属
GK	アシュリン＝ハリス	29	ノースカロライナ大学	ワシントン・スピリット
	アリサ＝ニューハマー	26	ペンシルベニア州立大学	ボストン・ブレイカーズ
	ホープ＝ソロ	33	ワシントン大学	シアトル・レインFC
DF	ロリ＝チャラップニー	31	ノースカロライナ大学	シカゴ・レッドスターズ
	ホイットニー＝エンゲン	27	ノースカロライナ大学	ウエスタン・ニューヨーク・フラッシュ
	ジュリー＝ジョンストン	23	サンタクララ大学	シカゴ・レッドスターズ
	アリ＝クレガー	30	ペンステイト大学	ワシントンスピリット
	ケリー＝オハラ	26	スタンフォード大学	スカイ・ブルーFC
	クリスティ＝ランボーン	39	モンマス大学	スカイ・ブルーFC
	ベッキー＝サウアーブラン	29	バージニア大学	FCカンザスシティ
MF	シャノン＝ボックス	37	ノートルダム大学	シカゴ・レッドスターズ
	モーガン＝ブライアン	22	バージニア大学	ヒューストン・ダイナモ
	トビン＝ヒース	26	ノースカロライナ大学	ポートランド・ソーンスFC
	ローレン＝ホリデイ	27	UCLA	FCカンザスシティ
	メガン＝クリンゲンバーク	26	ノースカロライナ大学	ヒューストン・ダイナモ
	カーリ＝ロイド	32	ラトガース大学	ヒューストン・ダイナモ
	ヘザー＝オライリー	30	ノースカロライナ大学	FCカンザスシティ
	メガン＝ラビノー	29	ポートランド大学	シアトル・レインFC
FW	シドニー＝ルルー	24	UCLA	ウエスタン・ニューヨーク・フラッシュ
	アレックス＝モーガン	25	カリフォルニア大学バークレー校	ポートランド・ソーンスFC
	クリステン＝プレス	26	スタンフォード大学	シカゴ・レッドスターズ
	エイミー＝ロドリゲス	28	南カリフォルニア大学	FCカンザスシティ
	アビー＝ワンバック	34	フロリダ大学	無所属

第2項 ノースカロライナ大学女子サッカー一部出身選手の活躍

アメリカの大学女子サッカー出身の選手は、アメリカ代表においてもプロリーグにおいても活躍が目覚ましい。もともとカレッジスポーツで女子サッカーは女子バスケットやソフトボールと並んで人気が高い。前述したように登録選手のほとんどが大学スポーツ出身者であったが、表 1-4 で示したのが過去の五輪全大会における登録選手の出身別大学の一覧である。なかでも特にノースカロライナ大学出身の選手数が最も多いことがわかった。アトランタ大会では他の大学と比べ最多となる7名の登録となっているが、リオデジャネイロ大会においても5名の選手が選出されており、6つの大会中5つの大会においてノースカロライナ大出身の選手が大会での最多登録となっていることもわかった。

表 1-4 過去の五輪全大会におけるアメリカ代表登録選手の出身大学別一覧

大学名/五輪大会	1996年アトランタ	2000年シドニー	2004年アテネ	2008年北京	2012年ロンドン	2016年リオデジャネイロ
ノースカロライナ大学	7	6	6	4	2	5
フロリダ州立大学	0	0	2	1	2	0
バージニア大学	0	0	0	0	1	1
ポートランド大学	2	3	0	1	1	1
ノートルダム大学	0	0	2	2	1	0
サンタクララ大学	0	0	1	1	0	1
ワシントン大学	0	0	0	1	1	2
スタンフォード大学	1	1	1	2	3	2
UCLA	3	3	2	1	1	1

また表 1-5 から、W杯において第 1 回大会である中国大会(当時は世界選手権)ではノースカロライナ大から最多 9 名の選手が選出されたが、2016 年のリオ五輪に至るまで過去全 7 大会すべてにおいて同大学出身者が選ばれているが、他大学と比較しても、ここまで多くの代表選手を輩出しているのはノースカロライナ大だけであることがわかった。

表 1-5 過去の W 杯全体会におけるアメリカ代表登録選手の出身大学別一覧

大学名/W杯大会	1991年中国	1995年スウェーデン	1999年アメリカ	2003年アメリカ	2007年中国	2011年ドイツ	2015年カナダ
ノースカロライナ大学	9	7	8	6	5	2	6
フロリダ州立大学	0	0	1	0	1	2	1
バージニア大学	0	1	0	1	0	1	2
ポートランド大学	0	1	2	2	1	2	1
ノートルダム大学	0	1	0	2	2	1	1
サンタクララ大学	1	2	1	4	2	0	1
ワシントン大学	0	0	0	0	2	1	1
スタンフォード大	0	1	1	1	0	1	2
UCLA	0	1	1	0	1	2	3

1990 年代、サッカーアメリカ女子代表は自国開催の 1996 年アトランタ五輪や 1999 年アメリカ W 杯で優勝を果たし、女子サッカーの競技人口や普及拡大など現在の強豪国への基礎を築いた時期でもあった。この時期のアメリカ代表において主力であったミア＝ハムやクリスティン＝リリーなど歴史に残る多くの有名選手がノースカロライナ大出身である。

ミア＝ハムは代表選手としてアトランタ五輪の金メダル獲得とアメリカ W 杯優勝の両方で貢献したが、2004 年の引退後にビジネス界に転身して成功した。2018 年に MLS(メジャーリーグ・サッカー、男子サッカーのプロリーグ)へ新規参入するロサンゼルス FC の共同出資者としても知られ、アマチュア選手からプロ選手までアメリカで女子サッカーをプレーする者の憧れの存在‘ロールモデル’としての役割も果たしている。

第3項 アメリカ大学スポーツにおける3つの組織とディビジョン制

ここからはアメリカ大学スポーツの特徴や取組み、組織や数多くの制度、トレーニング規定などを整理していく。大学女子サッカーの強さの要因を探る上で必要と考えるからである。また、大学スポーツを支える中高生年代の変遷や世界のサッカーの歴史とアメリカとの関係を整理するが、アメリカの女子サッカー全体を考察する上で必要と考えるからである。

過去に数多くの優秀な選手を育成しているアメリカの大学スポーツだが、現在は以下の3つの大きな組織団体が存在する。数多くの優秀な選手を育成しているアメリカの大学スポーツだが、以下の現状では3つの組織団体が存在する。

①NCAA(National Collegiate Athletic Association)

②NAIA(National Association of Intercollegiate Athletics)

③NJCAA(National Junior College Athletic Association)

ノースカロライナ大など多くの4年制大学はNCAA(全米大学体育協会)に属している。現在は23の競技種目と88の大会を運営しており、全競技1,000以上の大学から約4万人以上の選手が各大会に参加している。各競技に登録している選手総数は36万人以上と全米の大学スポーツ団体としては最大規模となっている。NCAAは3つのディビジョン(部)から構成されているが、表1-6の通りである。

表 1-6 NCAA の各ディビジョン加盟校数と特徴(2016年12月末)

ディビジョン	加盟校数	加盟校の例	スポーツ奨学金の有無	競技特徴
D-I	346	大規模な公立・私立大学	全額もしくは一部支給	全国レベル競技型
D-II	307	小・中規模な公立・私立大学	一部支給	地域レベル競技型
D-III	439	小規模な私立大学	支給なし	地域レベル参加型

各ディビジョンで特徴が分かれるが、それぞれに細かい規定がある。ノースカロライナ大やフロリダ州立大、UCLAなど女子サッカーの強豪大学のほとんどはディビジョンIに属している。

NCAAディビジョンIはアメリカ大学スポーツで最も競技レベルが高いリーグであるが、所属するためには男子と女子のスポーツ部がそれぞれ7部以上、あるいは男子が6部と女子8部以上の合計14部以上が必要である。また、学生選手にとって重要な奨学金だが大学リーグでも最も豊富な奨学金が準備されており、男子スポーツ部では最大で10人分ま

でのフルスカラーシップ、女子スポーツ部では最大 14 人分までのフルスカラーシップが承認されている。

ディビジョンⅡは米国で 2 番目に競技レベルが高いリーグであるが、所属するためには合計 10 部以上のスポーツ部が必要である。奨学金については大学リーグで 2 番目に多く、男子スポーツ部は最大 9 人分までのフルスカラーシップ、女子スポーツ部は最大 10 人分までのフルスカラーシップが認められている。

ディビジョンⅢは私立大学が多いが、大学数は全ディビジョンのなかで最も多い。ディビジョンⅢでは基本的にスポーツ奨学金が禁じられており、他のディビジョンのようにスポーツ特待生として選手を入学前にスカウトすることができない。ただし、スポーツではなく学力奨学金の数はディビジョンの中で最も多い。ディビジョンⅢに所属するためには合計 10 以上のスポーツ部が必要である。

もう一つ 4 年制の大学スポーツを統括する団体 NAIA (National Association of Intercollegiate Athletics) があるが、ここは多くの外国人選手が所属している。理由として入学と選手登録が比較的容易であるからだが、奨学金は男子スポーツ部も女子部も両方 12 人分までのフルスカラーシップが認められている。NAIA に所属する多くの大学は私立大学であり、他の団体と比べて大学数は多いが生徒数が少ないのが特徴である。

3 つ目は NJCAA (National Junior College Athletic Association) だが、これは短期大学のリーグである。短期なので 2 年間しかプレーができないが、ここでは 2 つのディビジョンに分かれている。ディビジョンⅠはフルスカラーシップが許可されているが、ディビジョンⅡはスポーツ奨学金を出すことが許可されていない。またスポーツ特待生として選手をスカウトすることはできないが、学力奨学金は認められている。

本研究では、最も競技レベルが高く、チャンピオンシップなどの全米最大の大学スポーツの大会を運営する NCAA を調査していく。

第4項 NCAA とカンファレンス制度の仕組み

アメリカの大学女子サッカーのなかで最も選手登録数が多いのはNCAAであるが、女子サッカーが正式種目となったのは1982年と比較的新しい。現在女子サッカーも3つのディビジョンに分かれているが、さらに重要なのはカンファレンスである。カンファレンスとは大学チームで構成されるリーグであり、表1-7に示したが32のカンファレンスに分かれている。

表 1-7 NCAA 女子サッカーの 32 のカンファレンス一覧

カンファレンス名	本部	加入大学
AAC	ロードアイランド プロビデンス	UCF、サウスフロリダ
America East(アメリカ・イースト)	マサチューセッツボストン	ニューハンプシャー、ストーニーブルック
ASUN	ジョージア マコン	FGCU、リブコム
Atlantic 10(アトランティック10)	バージニア ニューポートニュース	ラサール、セントルイス
Atlantic Coast(アトランティック・コースト)	ノースカロライナ グリーンズボロ	デューク、ノースカロライナ
Big 12(ビッグ12)	テキサスアーヴィング	ウエストバージニア、テキサス
Big East(ビッグ・イースト)	ニューヨーク ニューヨーク	ジョージタウン、バトラー
Big Sky(ビッグ・スカイ)	ユタ オグデン	イースタンワッシュ、モンタナ
Big South(ビッグ・サウス)	ノースカロライナ シャーロット	ハイポイント、ロングウッド
Big Ten(ビッグ・テン)	イリノイ ローズモント	ペンシルベニア、ラトガーズ
Big West(ビッグ・ウエスト)	カリフォルニアアーバイン	UCアーバイン、カリフォルニア州立ノースリッジ
Colonial(コロニアル)	バージニア リッチモンド	ホフストラ、ノースイースタン
Conference USA(カンファレンス USA)	テキサスアーヴィング	ライス、ノーステキサス
DI Independent(DI インディペンデント)	独立系	デラウェア、サウスカロライナ
Horizon(ホライゾン)	インディアナ インディアナポリス	ミルウォーキー、IUPUI
Ivy League(アイビー・リーグ)	ニュージャージー サマセット	プリンストン、イェール
Metro Atlantic(メトロ・アトランティック)	ニュージャージー エジソン	マンハッタン、シエナ
Mid-American(ミッド・アメリカン)	オハイオ クリーブランド	ケント州立、トレンド
Missouri Valley(ミズーリ・バレー)	ミズーリ セントルイス	ドレイク、UNI
Mountain West(マウンテン・ウエスト)	コロラド コロラドスプリングス	サンホセ州立、サンディエゴ州立
Northeast(ノースイースト)	ニュージャージー サマセット	ブライアント、フェアリーディキンソン
OVC	テネシー プレントウッド	マーレイ州立、イースタンケンタッキー
Pac-12	カリフォルニア ウォルナットクリーク	スタンフォード、UCLA
Patriot(パトリオット)	ペンシルベニア センターバレー	海軍兵学校、バックネル
Southeastern(サウスイースタン)	アラバマ バーミンガム	サウスカリフォルニア、テキサスA&M
Southern(サザン)	サウスカロライナ スパルタンバーク	UNCG サムフォード
Southland(サウスランド)	テキサス フリスコ	ラマー、SFA
Southwestern(サウスウエスタン)	アラバマ バーミンガム	アラバマ州立、ハワード
Summit League(サミット・リーグ)	イリノイ エルムハースト	サウスダコタ州立、デンバー
Sun Belt(サン・ベルト)	ルイジアナ ニューオーリンズ	サウスアラバマ、アーカンソー州立
West Coast(ウエスト・コースト)	カリフォルニア サンブルーノ	ペッパーダイン、サンラクララ
Western Athletic(ウエスタン・アトランティック)	コロラド イングルウッド	UMKC、ユタバレー

各カンファレンスはアウェイの移動距離などを考慮して基本的に近隣の州で構成されているものが多いが、チームによって予算や実力においてかなりの開きがあるカンファレンスもある。カンファレンス内で約半年間かけてレギュラーシーズンの試合を行うが、上位チームが全国大会に相当チャンピオンシップに出場できる。

このなかでノースカロライナ大はアトランティック・コースト・カンファレンス (Atlantic Coast Conference/ACC) に所属している。ACC は 1953 年に創設され、サッカーをはじめバスケットボールなど 20 種目以上の競技によるレギュラーシーズンやチャンピオンシップ予選大会を開催・運営している。表 1-8 に示しているがアメリカ東海岸の 12 校によって構成されている。

表 1-8 ACC のカンファレンス構成大学の一覧(2017 年度)

学校名	所属州	本拠地	加盟年度	競技総数
ウェイクフォレスト大	ノースカロライナ州	ウィンストン・セーラム	1834年	18
バージニア工科大	バージニア州	ブラックスバーグ	1872年	21
バージニア大	バージニア州	シャーロットツビル	1819年	25
ノースカロライナ州立大	ノースカロライナ州	ローリー	1887年	25
ノースカロライナ大	ノースカロライナ州	チャペルヒル	1789年	28
マイアミ大	フロリダ州	コーラルゲーブルズ	1925年	17
メリーランド大	メリーランド州	カレッジパーク	1856年	27
ジョージア工科大	ジョージア州	アトランタ	1885年	17
フロリダ州立大	フロリダ州	タラハシー	1851年	19
デューク大	ノースカロライナ州	ダーラム	1838年	26
クリムゾン大	サウスカロライナ州	クレムゾン	1889年	19
ボストン・カレッジ	マサチューセッツ州	チェストナットヒル	1863年	31

第5項 NCAA とアスレチック・デパートメントの存在と役割

NCAA の歴史は 1906 年に Intercollegiate 19 Athletic Association of the United States として創設され、1910 年からは今に至る National Collegiate Athletic Association /全米大学体育協会)という名称となった。現在は 1100 校の大学が加盟し、約 1 万 9000 チームと約 50 万人の選手が所属している。

石山(2008)の論文の記載によると、当初は競技規則の管理等を主業務としていたが、陸上競技大会から始まり、次第に種目が増加。専門のスタッフを雇用し、次第に大きな組織へと進化していった。1999 年には NCAA の大会放映権に関して 11 年間 60 億ドル以上の契約を結ぶなど資金面での拡大も実現した。初のテレビ放映権を結び、一部の競技でリーグ戦がテレビ中継されるなど人気が高いものとなっている。

2017 年 8 月、NCAA トップであるマーク＝エマート会長(Mark Emmert)が来日、組織運営や制度、現在抱える課題などの話を伺った(2017 年 8 月 30 日(水) 16:00～@株式会社ドーム本社 講演内容 : 「State of College Athletics～米国大学スポーツの現状～」及びその後の囲みインタビューから)。*インタビューの詳細は研究結果にて掲載。

NCAA は全米で同協会に所属する各大学の競技スポーツに関する問題について協議、運営を進める組織である。大学スポーツの円滑な運営に取り組んでいる約 1200 の教育機関、競技連盟、個人から組成される協会である。地域やカンファレンスを越えて発生する問題や大学スポーツ全体の課題を、検討して解決していく。

NCAA は大学のスポーツを「教育プログラム」の一環として考えており、プロスポーツ的になりがちな大学選手をあくまでも「学生」として維持することに努力を注いでいる。2014 年、オバンノン裁判と呼ばれる選手の肖像権に関する訴訟問題も起こったが、大学スポーツにおける頂点に位置し、大学へあらゆるハード・ソフト面のサービスを提供している。NCAA の規定の中にも「弊団体の目的は、学生スポーツ選手のために大学のアスレティックス・プログラムを創設、発展させ、改善して、教育的リーダーシップ、フィジカル・フィットネス、そして運動競技能力の優秀性を引き伸ばし、成長させることである」と謳われている。

また、NCAA 所属の各大学において、文武両道や男女平等の理念を実現するため、大学スポーツに関わるすべてのことを管理しているのが「アスレティック・デパートメント」(Athletic Department/以後、AD)である。これは大学の一部門だが、学長・総長の直轄組織で経営的にも独立しているのが一般的である。大学のスポーツ活動は、この AD によって統括・管理・運営されており、最も上長にあたるアスレティック・ディレクターは AD に所属するすべてのチームを管理・運営、監督やコーチは、それぞれのチームの練習計画の立案・指導・試合を担当し、選手はプレーすることに集中できる。NCAA を理解する上で、このアスレチック・デパートメントの存在が最も特徴的な組織である。

第6項 NCAAのシーズン制とトレーニング規定

NCAAを理解する上で次に重要なのは、シーズン制と独自のトレーニング規定である。アメリカの大学スポーツは基本的にシーズン制で運営されているが、例えばアメリカンフットボールは、秋から冬で9～12月がレギュラーシーズンである。

また練習において、NCAAの規定に従って行われます。アメリカンフットボールの場合、第1試合の5週間前からチームとしての練習が許可されており、そのなかで、ヘルメットの着用が認められるのは1週間のうち何日まで、ゲーム形式の練習は何日までなど、細かな規定が決められている。これはNCAAが過去の事故や怪我から判断し、全体で協議して規定を決めていく。

またシーズンが終わるとチームとしての練習は翌年のシーズンまで行えない。チームメイト同士のキャッチボールですら許されないのだ。オフシーズン中の選手は、次のシーズンに向けて基礎体力向上のためのトレーニングや、怪我の治療をした部分のリハビリテーションを行ったりするが、並行して勉強にも取り組んでいる。成績が悪い場合は、スポーツする機会を与えられない規定となっているからだ。さらにシーズン中も、1週間に練習できる時間の上限は20時間と決められている。これは種目にかかわらず同じだ。また週に1日は完全な休養日としなくてはならないというNCAAの規定がある。これらは、学生の本分はあくまでも勉強にあるというNCAAの理念から生まれている。

アメリカの大学スポーツ及び女子サッカーを研究する上で、こちらの基本理念を正しく理解する必要がある。

表 1-9 NCAA スポーツのシーズン制における期間

春シーズンのスポーツ 2月下旬から5月下旬まで	秋シーズンのスポーツ 8月上旬から1月上旬まで	冬のスポーツ 10月～3月下旬まで
・ボート ・ゴルフ ・バレーボール(男子) ・ソフトボール ・水球(女子) ・ラクロス ・テニス ・陸上競技(屋内) ・野球	・サッカー ・クロスカントリー ・アメリカンフットボール ・水球(男子) ・フィールドホッケー ・バレーボール(女子)	・フェンシング ・スキー ・室内陸上競技 ・アイスホッケー ・体操 ・ライフル ・レスリング ・水泳 ・バスケットボール

第7項 アメリカ女子サッカーの中高生年代の変遷

アメリカの大学スポーツや大学女子サッカーを理解する上で、基盤となる中高生年代の変遷は重要だが、石山（2008）の論文の記載によると、女子サッカーはアメリカの中流階級以上の特に白人社会の少女たちに人気があったと述べている。逆に少年達に絶大な人気を誇っていたのはアメリカンフットボールだったが、あまりに激しいぶつかり合いのため少年達には危険が多い。また人気があったクォーターバックのようにパスを出すポジションはごく一部のものしかプレーできず、ディフェンスばかりでほとんどボールに触ることができない場合もある。そこで全員がボールに触れて、全員がパスを出せて、全員がゴールを奪えるサッカーが、1970年代からアメリカの少年の間に広まっていった。この新しいスポーツのブームで少女達もプレーするようになっていった。

80年代になると少女達は大学生として大学スポーツの選手として成長していった。アメリカの女子サッカーはヨーロッパに比べ歴史こそ浅いが、大学やプロリーグではなく、歴史的には下の年代から拡大をしていった。現在日本では女子のサッカー人口は全体の数パーセントだが、アメリカではサッカー人口の約40%が女子の競技者である。これはヨーロッパのどのサッカー強豪国も及ばず、アメリカ社会全体で女子サッカーが人気のあり、また少女の年代にまで浸透しており、底辺の広さが育成面の強みとなっている。表1-10が示すようにNFHS(National Federation of State High School Associations/米国国立高校協会)の過去の登録者数の変遷は、2017年には20万を越えて高校年代におけるアメリカの女子サッカーの浸透を表して、大学女子サッカーを支えているとも言える。

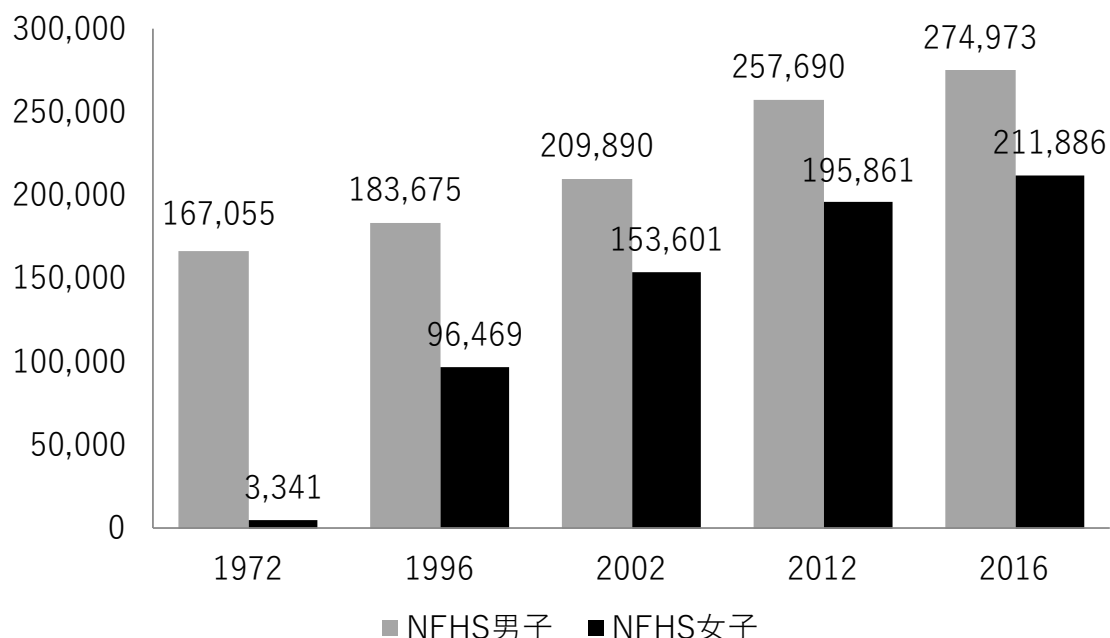


表 1-10 全米高校サッカーにおける男女登録者数の変遷(1972年～2016年)

第8項 世界の女子サッカーの歴史と新興国アメリカ

背景の最後の調査として、世界の女子サッカーの歴史をアメリカの関係を整理しておく。女子サッカーの新興国であるアメリカが短期間で世界のトップクラスの強豪国になった歴史的な経緯である。

・1865年、イングランドにおいて近代スポーツとしてサッカーが誕生した。イングランドでは最初は学生のスポーツとして発達し、短期間で大衆の人気を得た。女子も意外に早い段階でこの競技に興味を持ち、記録に残る最も古い女子サッカーの試合は1895年の北イングランド対南イングランドの選抜試合とされている。結果は北イングランドが7-1で勝利しており、正確な記録はないが、地域でのクラブとしての活動がこれより以前からあった可能性が考えられる。

・1902年、女子サッカーの人気が高まると同時に競技人口も増えたが、イングランド・サッカー協会(FA)は「サッカーは男性のスポーツ」という考えから女子サッカーの競技人口が増えるのをよしとせず、各クラブへ女子選手と試合を組まないように指示を出した。当時のFAは、これ以上女性がサッカーに進出することをよしとしなかった。

・1914年、この年に勃発した第一次世界大戦で状況は一変する。多くの男性が戦場へ赴いたため、女子たちが兵器や缶詰工場などの労働に就き、休憩時間の余暇としてサッカーをプレーし、各工場でチームを組織し始めたのだ。その中でもイングランド中西部・プレストンシティの“ディッカー・レディース”というチームは練習を続け、試合でも勝利を重ねて人気が高まった。毎試合1万人以上の観客を集め、入場料収入の多くは戦傷帰還者への支援にあてられた(当時、男子にプロ選手は存在したが彼女たちは全員アマチュア選手だった)。

・1918年、第一次世界大戦が終了した後も“ディッカー・レディース”は人気を保ち続け、1920年にリバプールで開催された試合では53,000人以上の観客を集めたため、全国的なニュースとして流れた。だが、FAは戦争により多くの選手を失い、各クラブが苦しんでいる現状から、女子サッカーの勢いを脅威と感じた。ついに1921年12月、FAは協会加盟のすべてのクラブに対して「女子サッカーにグラウンドの貸与は禁止する」と伝えた。これは実質的に女子サッカーから練習や試合の場所を奪う“禁止令”に近いものであった。実際にこの通達を境に“ディッカー・レディース”をはじめ多くの女子チームは衰退していった。この通達が取り消されるのは実に約50年後の1970年だった。

・1955年、イングランドと同じくドイツとオランダのサッカー協会も同じような通達を出し、女子サッカーは冬の時代を迎えた。しかし女子サッカーに対して厳しい時代でも諦めず、選手や関係者たちは活動を続けて、1957年に「国際女性サッカー協会」がルクセンブルグで立ち上がった。同年、第1回ヨーロッパ女子サッカー選手権が開催され、イングランド・ドイツ・オランダなどサッカーが禁止された国々が参加していた(優勝国はイングランドだった)。

・1960年代後半、ヨーロッパの女子サッカーが衰退するなか、世界で新しい流れが起きたのは新興国アメリカだった。「ウーマンリブ(女性解放運動)」が盛んになり、社会的な価値観や女性の地位に変革を起こす動きはスポーツにも及んだ。1972年、連邦法「TitleIX」

(教育法第9篇または男女教育機会均等法)が成立、連邦政府から援助を受けている教育機関において、性に基づいた差別を一切禁止するという法律で、男女がスポーツをする機会の平等性も含まれていた。この法律は多くの大学女子サッカー部の創設に関わっていくが、それ以前のアメリカでサッカーといえば「少女のスポーツ」とされていた。当時、アメリカの児童達に圧倒的な人気を得ていたのはアメリカンフットボールだった。ただ、怪我や危険なプレーも多く、少年達に勧められたのはサッカーであった。少年に広がったサッカーは少女も興味を持ち、プレーの手軽さからまたたく間に広まっていった。

・70年代から80年代にかけて、サッカーはアメリカの少女が最も多くプレーする競技となった。特徴的なのは施設やプレー環境から、大都市郊外に住む白人系のミドルクラス以上の家庭の女子において多く広まった。これがアメリカの女子サッカーの発展を支える基盤となった。後に少女たちは大学に進学するが、そこで大学にサッカー部がないと分かったと創部へと動き出した。

・1982年、NCAA(全米大学体育協会)のチャンピオンシップが初めて開催された。最初の参加学校数は12校だったが、大学スポーツを統括する同団体の全米規模の大会は初めてだった。こういった動きから、アメリカの大学において女子サッカー部の創設が拡大していった。90年代以降、施設の充実や優れたコーチ(各カテゴリーの代表監督経験者も含まれていた)を招聘など、アメリカの大学女子サッカーのレベルは急激な成長を遂げていった。大学サッカーの競技レベル向上は、アメリカが現在に至る女子サッカーの強豪国となるための基礎となった。

・1991年、アメリカの女子サッカー人気を決定づける出来事が起きた。第1回女子ワールドカップ(当時は世界選手権)での優勝という快挙であった。大会は同年11月16日から30日まで中国・広州を中心とした5都市で開催され、出場国は12チーム、中国、台湾、ブラジル、ニュージーランド、ナイジェリア、ノルウェー、デンマーク、スウェーデン、ドイツ、イタリア、アメリカ、そして日本だった。

16日の開幕戦で地元・中国が優勝候補のノルウェー(第二回大会で優勝)を破り、大会は一気に盛り上がった。決勝戦はアメリカ対ノルウェーだったが、アメリカはミッシェル＝エイカーズを中心に攻撃的なサッカーを展開し、2-1で勝利して初代女王となった。エイカーズは決勝戦での2得点含め大会通算10ゴールをあげ、得点女王のタイトルも獲得した。当時、アメリカのマスコミは北欧諸国や中国を優勝候補に挙げており、アメリカ女子代表は下馬評を覆す結果となった。全米において、「女子サッカー」という競技の認知度が一気に上がったため女子の中で人気スポーツとなり、代表選手は少女たちの憧れの対象となった。この90年代以降、今に至るアメリカ女子サッカーの発展が始まっていった。

第2節 先行研究のまとめ

アメリカの女子サッカーに関しての強化や育成の研究では、歴史からリーグ戦の強化策、あるいはユース年代の育成強化や指導者育成についての幾つかの報告がされている。アメリカの大学女子サッカーに関する研究としては、日本と比較研究して人気・実力ともに世界のトップレベルであるアメリカ女子サッカー社会的または教育的視点から調査、また 1972 年施行された教育期間における女子がスポーツをする機会の平等性を目指した法律「Title IX of Education Amendments of 1972 (1972 年教育修正法 9 編)」の意義などを明らかにした東明ら(2003)の研究論文が存在する。

また、NCAA の女子サッカーに関してはアメリカの大学スポーツの収益構造を分析して、スポーツの成績・大学経営・環境整備が相互に関係して生み出す NCAA の好循環を明らかとした石山(2008)の研究論文が存在する。そこから日本の高校・大学における女子サッカーの発展について考察している。

以上の先行研究から、アメリカの大学スポーツ全般や女子サッカーの歴史に関する研究は行われているものの、大学側が NCAA 女子サッカーやチャンピオンシップの運営などに与えた影響について明らかにした研究は見当たらなかった。

第3節 研究目的

本研究は、アメリカの女子サッカーの発展にノースカロライナ大が与えた影響要因を明らかにすることを目的とする。

第2章 研究手法

第1節 インタビュー調査及び公開情報をもとにした文献調査

本研究では、インタビュー調査と公開情報をもとに文献調査を行った。

1) インタビュー調査

- ・ノースカロライナ大においてアンソン＝ドーランス監督はじめコーチ陣、選手、スタッフにインタビュー調査する。

- ・NCAA ディビジョン I の女子サッカー部で活躍している日本人コーチや選手にインタビュー調査する。インタビューでは以下の質問内容を基本とする。

Q 最近のノースカロライナ大の女子サッカーの取組みについてどういったものがあるか。

また他の大学でどのような特徴的な取組みがあるか。

Q どのような経緯で現在のコーチの役職に就いたか。指導者育成ではどのようなメソッドや育成組織から学んだか。

Q 現在のアメリカでは一般的に指導者はどのようにして育成されているか。また指導者のレベルをあげるために、継続的な取組みは何ですか。

Q キャンプや合宿などの取組みはどのようになっていますか。

Q 地域の育成組織や街クラブとの交流はどのようになっているのでしょうか。

Q リクルーティング(選手のスカウト)で全米ネットワークはどのように形成されていますか。またどういった基準で選手を採用していますか。

Q 毎年 NCAA が行なっているスカウティングのテストについてどう思うか。

Q 「TitleIX」は女性選手に機会均等を与えたと思うか。また、この法律が女性のカレッジスポーツ全体にどのような影響を与えたと思うか。

Q 今後のキャリアをどのように積み上げていこうとお考えでしょうか。他の大学やチームからのヘッドハントはあるのでしょうか。

Q アメリカの大学女子サッカーが現在抱えている課題は何でしょうか？

- ・NCAA 関係者に NCAA の変遷や取組みをインタビュー調査する。

2) 公開情報による文献調査

- ・ドーランス監督に関する書籍、インターネットにおける公開情報、ノースカロライナ大学の資料で調査する。

- ・アメリカの中学・高校生年代における女子サッカーの変遷や競技者人口の推移を調査する。

- ・NCAA の主に女子サッカー競技についての歴史的経緯や取組みなどを調査する。

第3章 研究結果

第1節 ノースカロライナ大女子サッカー部の変遷

1) 1979年に創部されたUNC女子サッカー部だが、発端はその3年前の男子サッカー部創設に触発された女子生徒が、アンソン＝ドーランス監督(1976年から同大学の男子サッカー部監督に就任)に創部を依頼した。最初は女子サッカーの指導経験がないことを理由に断ったが、生徒たちの希望もあり創部を決定した。この時の女子生徒の約半数以上が高校時代にサッカー経験があった。2017年シーズンの現在に至るまでドーランス氏が監督を務めているが、同年シーズンにおけるチーム状況を表3-1にまとめた。

表 3-1 ノースカロライナ大・女子サッカー部についての現状(2017年シーズン)

項目	詳細	主なトピック
歴史	1979年に創部	アンソン＝ドーランス氏が創部、2017年時点に至るまでヘッドコーチ(監督)を務める。
コーチ&スタッフ	8名	・ヘッドコーチ(監督)： アンソン＝ドーランス ・アシスタントコーチ： クリス＝デュカー ・アシスタントコーチ： デイモン＝ナハス ・アシスタントコーチ： ビル＝パラディーノ ・マーケティング&ソーシャル メディア(SNS)コーディネーター： ブリタニ＝バートク ・女子サッカー部長 トム＝サンダー ・学士課程コーチ： カラ＝ヴァッセル 学生課程コーチ： シドニー＝ウーテン
部員数	35名	35名のうち外国人選手は2名 (ともにイングランド国籍)

選手セクション	なし	全選手がリクルーティング(スカウト)による採用。
チーム予算	不明	各競技別で大学側は公開していない
ホーム試合会場	サッカー専用スタジアム (4,200 席)	男子サッカーと男女ラクロス部との兼用
練習場	天然芝 1 面、人工芝 1 面(ともに男子サッカー部と兼用)	トレーニングジム(他競技と兼用)と寮が完備。寮は一部屋 2 から 4 名のシェア
チーム戦績	NCAA 女子サッカー・チャンピオンシップ 21 度優勝は歴代最多。2017 年 NCAA チャンピオンシップではベスト 16 敗退	2008 年、NCAA 女子サッカー・チャンピオンシップ歴代最多の優勝記録を達成したドーランス監督は NCAA の殿堂入りを果たした。

2) 就任当初、ドーランス監督は男子サッカーと同じ練習方法を用いるがほとんど機能しなかった。監督は男子とは違った攻撃と守備のトランジション(切替の速さ)や、守備時に「5 バック」とディフェンスの強化になる「3-4-3」のフォーメーションを採用する。また男子の練習ではチーム練習と個人練習が主だったが、その間に少人数で行うグループ練習を取り入れた。さらに、ピッチ内よりピッチ外でのコミュニケーションを重要視し、練習が終わった後やオフのチームイベントを多く開催した。これらの取組みと練習の効果から、チームは創部から 2 年で 1981 年 Women for Intercollegiate Athletics for Women (AIAW) という女子競技者だけの大会で全米優勝を果たした。

3) 1981 年、ドーランス監督は NCAA 女子サッカーにおけるチャンピオンシップ (CS) 開催が競技力アップにつながると考え、NCAA 本部に対して正式競技と認めるよう提案したが認められなかった。そこで同じ考えを持つコロラド大学のサッカーコーチ・クリス＝リドストーン氏と共に行動を起こし NCAA に対して共同提案、何度かの交渉の末に女子サッカーを正式競技として認めさせた。さらに翌 1982 年の NCAA 初の女子サッカー全米大会であるチャンピオンシップ開催も決定させた。

4) 初めての NCAA チャンピオンシップへ向けた練習を続けるも実戦経験の少なさを感じ、フレンドリーマッチを同州内の大学や高校あるいは近隣の州の大学と開催した。このことがノースカロライナ州及び近隣の大学や高校で女子サッカー部の創設へと繋がり、下の年代である中学校や小学校でもサッカーを始める女子が増え、底辺が拡大していった。

5)1982 年、記念すべき女子サッカーの第 1 回 NCAA チャンピオンシップが開催されノースカロライナ大が優勝した(写真 3-1)。大学スポーツ全体において女子サッカーの認知度が上がり、出場したほとんどの大学において翌年以降に部員が増加した。なかには他競技から女子サッカーへ転部した者もいた。



写真 3-1 第 1 回 NCAA 女子サッカー・チャンピオンシップ優勝の記念楯

また、同時期の NCAA 女子サッカーの変遷や取組みは以下の通りある。

1)1982 年に NCAA 女子サッカー・チャンピオンシップが開催された。この大会開催を機に参加数は 1982 年第 1 回大会において 12 校だったが、4 年後の 1986 年では 16 校と増加した。さらに 2017 年には 64 校が参加する全米の女子サッカー・トーナメントとしては最大規模の大会となっていることがわかった。

また表 3-2 で示すように、登録大学数は 1970 年から 1980 年代初頭までは 100 校あまりと変化しなかったがチャンピオンシップ開催を境に増加、1990 年代には 600 校を越え、2000 年代では 900 校以上となり NCAA 全ディビジョンにおける女子サッカー部の登録大学数は増加し続けたことがわかった。

表 3-2 NCAA 全ディビジョンにおける女子サッカーの選手登録数の変遷

年数	登録大学数	年数	登録大学数
1982 年	104	1995 年	631
1985 年	121	2002 年	868
1991 年	258	2008 年	959

2) チャンピオンシップ開催に合わせて、NCAA において定期的に女子サッカーの評議会が開かれることも決まった。ドーランス氏とリドストーン氏らはじめ大学女子サッカーの現場を指導しているコーチ陣が大会の評議員となり、今後のリーグ運営や強化の構築など発言の機会を得た。

それ以降のノースカロライナ大の変遷は以下の通りである。

1) 1980 年代後半、ドーランス監督とアシスタントディレクター達が最も力を注いだのだが新しい才能発掘を目的としたリクルーティングだった。選手とは直接会い、直接話を聞くことが基本姿勢だったドーランス氏達だったが、地元のノースカロライナ州及び近隣州だけで優秀な選手を集めることの限界を感じた。そこで逆に同大学に集まって数日間練習や試合を通して新しい選手を見つける「リクルーティング・キャンプ」を開催、これはアメリカンフットボールなど男子競技では行われていたが、女子競技では先駆けた行為だった。

これ以降、多くの大学女子サッカー部がこの手法を取り入れ、全米の高校生にとって女子サッカーをプレーする機会が与えられた。ノースカロライナ大はこの活動で、高校生年代の各州大会で結果を出さなかった高校や有名でなかった選手もリクルート、より多くの選手にも育成の機会を与えた。

2) アメリカサッカー協会からドーランス氏にサッカー女子代表監督就任の打診があったが、当初は男子サッカー部と兼任していたため難しいと判断して断った。だが、数度の依頼があり大学側と話し合った結果、男子サッカー部監督の任期が 1988 年シーズンまでとなり、1986 年から代表監督に就任した。1991 年第 1 回女子 W 杯(当時は世界選手権)では、監督の戦術を最も理解してコミュニケーションも取りやすいノースカロライナ大出身の選手を 9 名選出して臨んだ。結果はメディアや多くのサッカー関係者がドイツや北欧勢有利という事前予想を覆し、アメリカ代表は優勝を果たした。全米における女子サッカーという競技の認知度が上がった。NCAA の大学女子サッカー部も増加した。

3) 1990 年代始め、多くの選手に出場機会を増やす重要性を感じ、NCAA チャンピオンシップに対して FIFA ルールとは違う NCAA 独自のルールが実現した。これにより選手交代枠が 3 名から基本的に自由となり、また身体上の理由から認められなかった延長戦が女子の大会でも実現した。規定の試合時間で決着がつかない場合、前後半 10 分ずつの延長戦が実施されることになった。これで決着がつかない場合にのみ PK 戦となった。多くの選手にとって、さらに試合経験を積む機会が生まれた。

また、同時期の NCAA 女子サッカーの変遷は以下の通りある。

1) 90 年後半に入ると他大学もノースカロライナ大のリクルーティングの手法を学び、全米

で多くの選手が発掘され、他競技からスカウトされる選手も多く存在した。結果、NCAA 女子サッカーの競技力向上に繋がった。

2) NCAA 女子サッカーの競技人口においても、1982 年に初めてチャンピオンシップ開催を機に登録選手数は増加傾向を辿っていることがわかった。ノースカロライナ大が所属しているディビジョン I は図 3-2 と図 3-3 に示したが、最も競技レベルが高いとされるディビジョン I において 1995 年のチーム数は 189 だったが 2008 年においては 310 となり、登録選手数も 1995 年は 4,423 人だったが 2008 年では 8,117 人と増加していた。推移として 1995 年からの 13 年間でチーム数は約 1.6 倍、登録選手数は約 1.8 倍と増加しているのがわかった。

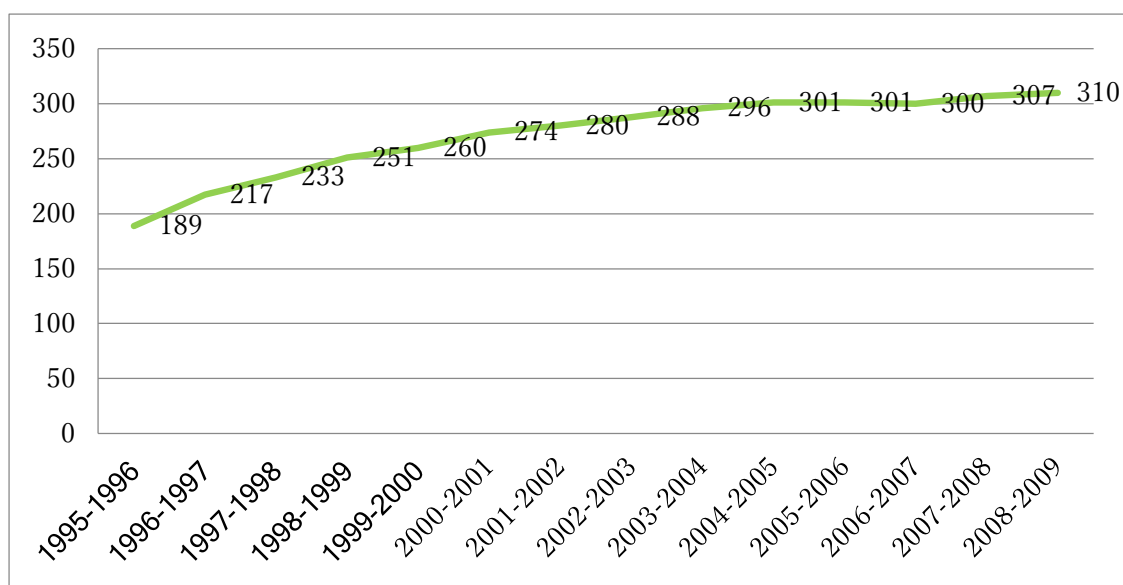


図 3-1 NCAA・ディビジョン I・女子サッカーのチーム数の推移

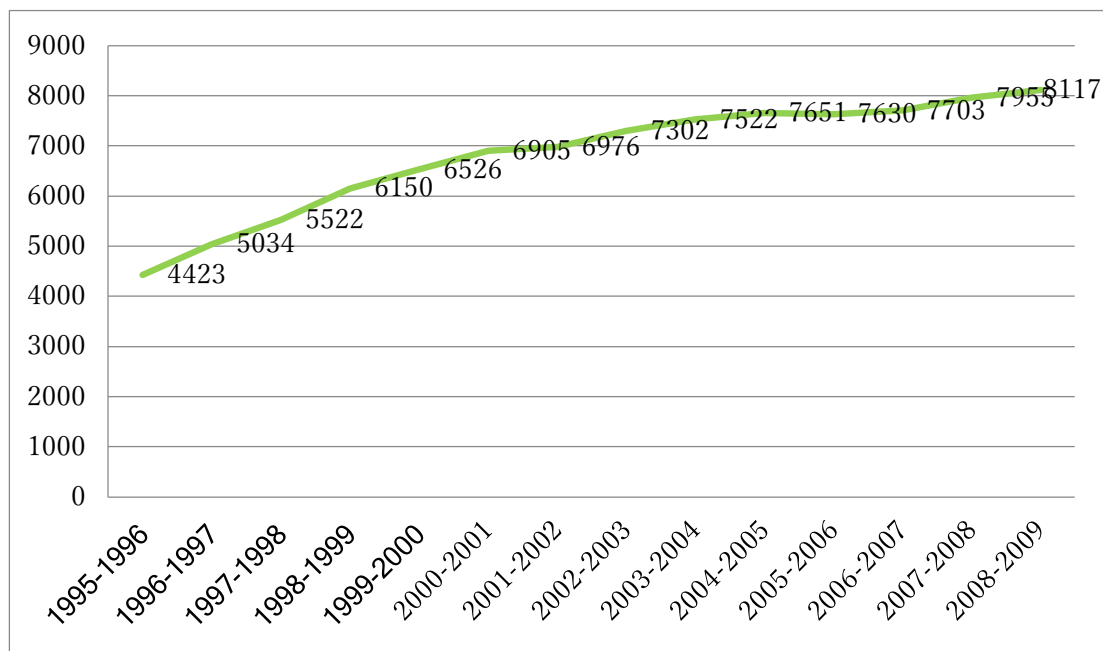


図 3-2 NCAA・ディビジョン I・女子サッカー選手の登録者数の推移

さらに図 3-4 に示すように、ディビジョン I の全大学に占める女子サッカー部が所属する大学の割合は 1995 年に 61.8%だったのに対し、2008 年には 93.1%と増加しており、男子サッカー部が占める 59.2%をはるかに上回っていたことがわかった。

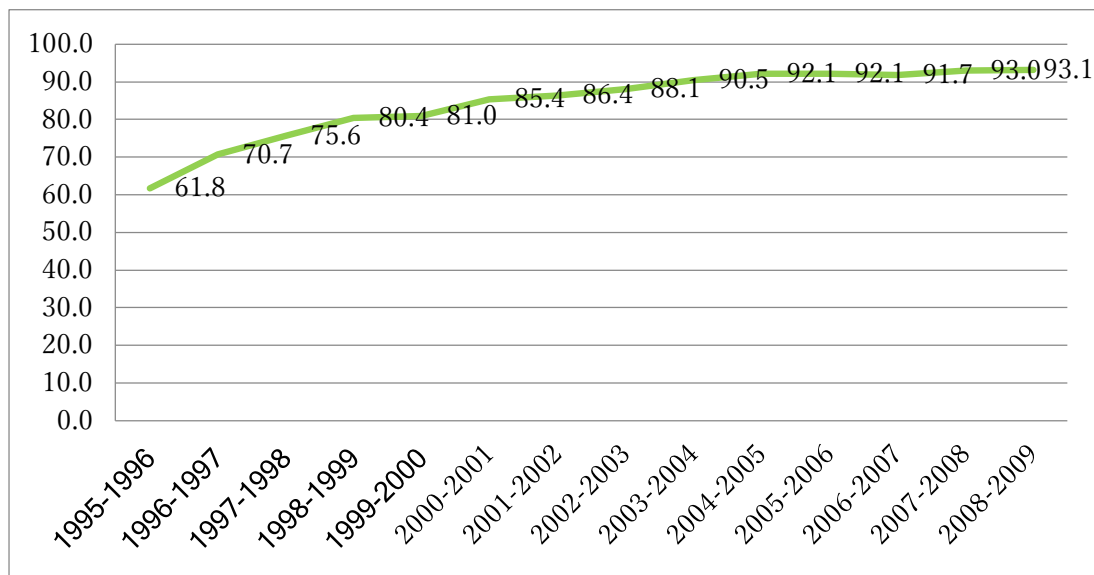


図 3-3 NCAA ディビジョン I・女子サッカーのチーム割合の推移

ディビジョン II においては図 3-5、図 3-6 に示すように、1995 年のチーム数は 127 だったが 2008 年においては 225 となり、登録選手数も 1995 年は 2,578 人だったが 2008 年で

は 5,437 人と増加していた。推移として 1995 年からの 13 年間でチーム数は約 1.8 倍、登録選手数は約 2.1 倍と上昇しているのがわかった。

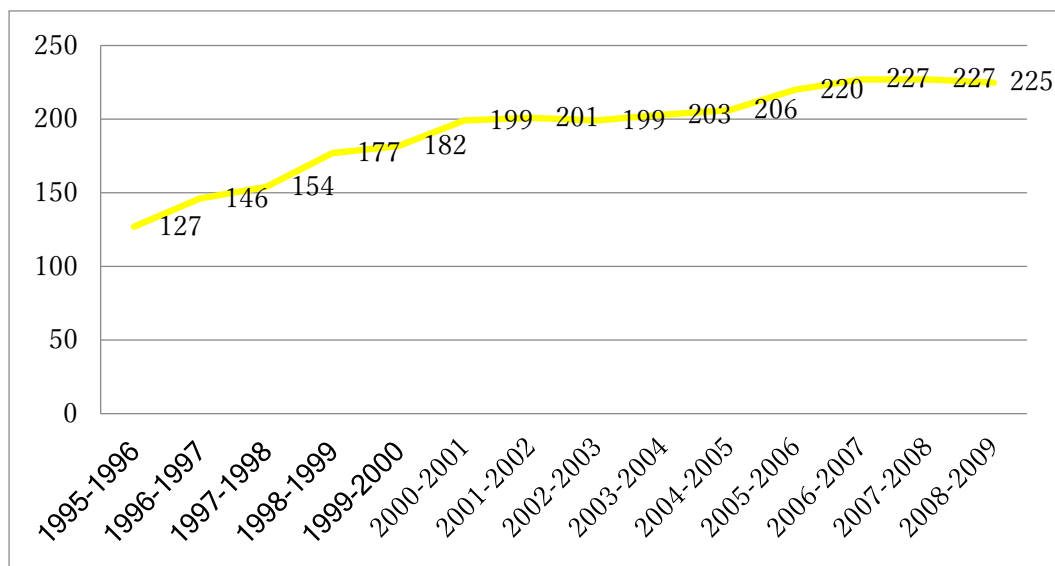


図 3-4 NCAA ディビジョンⅡ・女子サッカーのチーム数の推移

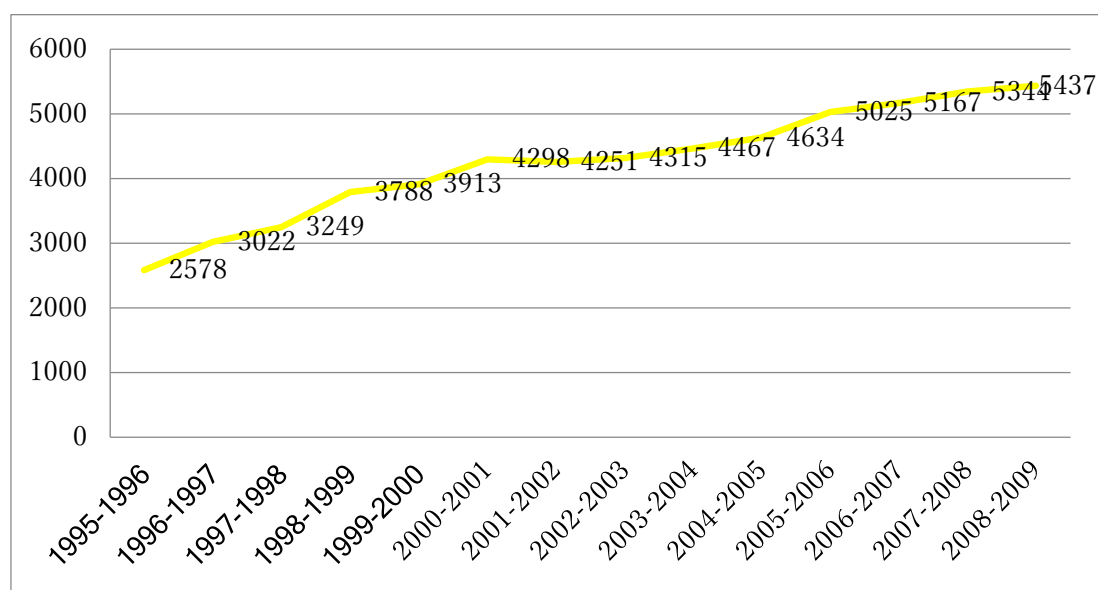


図 3-5 NCAA ディビジョンⅡ・女子サッカーの登録選手数の推移

さらに図 3-7 に示すように、ディビジョンⅡの全大学に占める女子サッカー部が所属する大学の割合は 1995 年に 43.8%だったのに対し、2008 年には 77.1%と増加しており、男子サッカー部が占める 61.6%を上回っていたことがわかった。

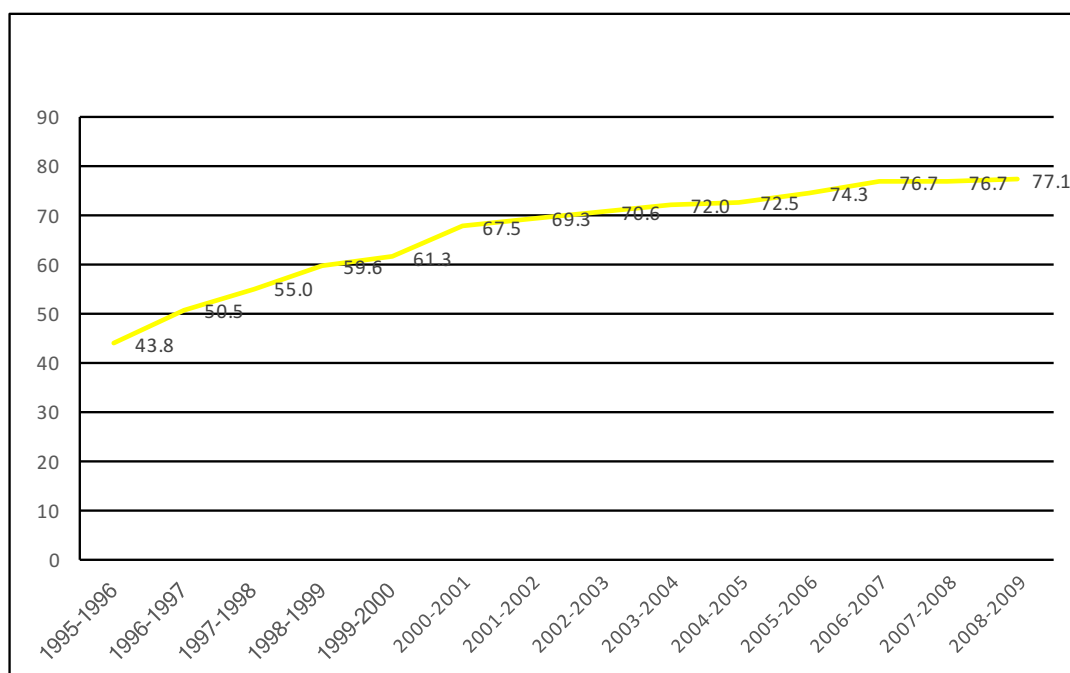


図 3-6 NCAA ディビジョンⅡ・女子サッカーのチーム割合の推移

ディビジョンⅢにおいては、図 3-8、図 3-9 に示すように 1995 年のチーム数は 315 だったが 2008 年においては 424 となり、登録選手数も 1995 年は 6,678 人だったが、2008 年では 9,803 人と増加していた。同時期の推移として 1995 年からの 13 年間でチーム数は約 1.3 倍、登録選手数は約 1.5 倍と増加していることがわかった。

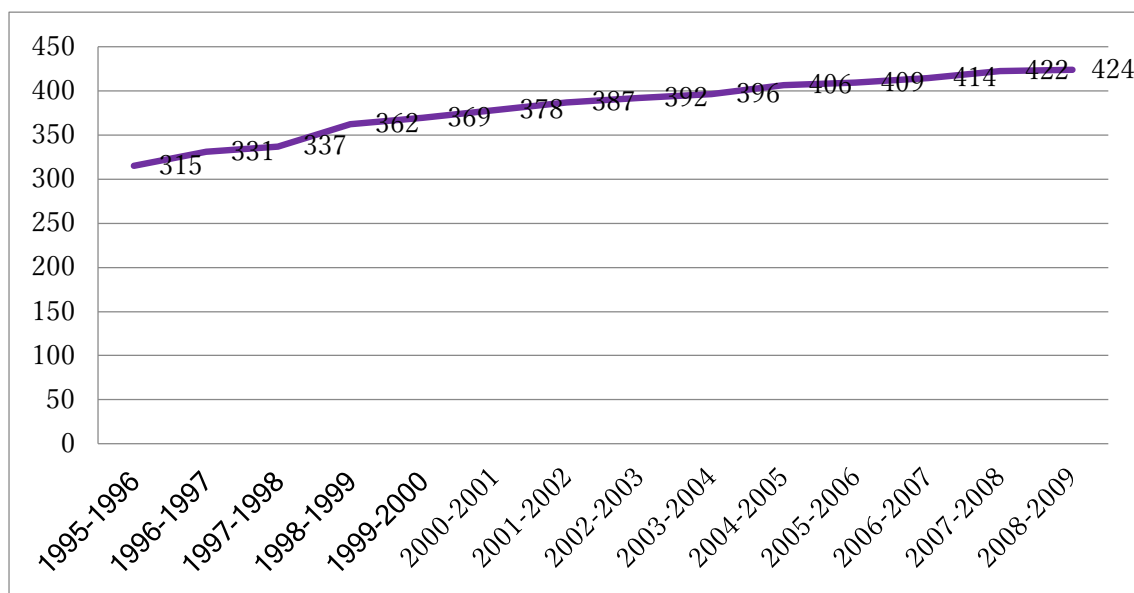


図 3-7 NCAA ディビジョンⅢ・女子サッカーのチーム数の推移

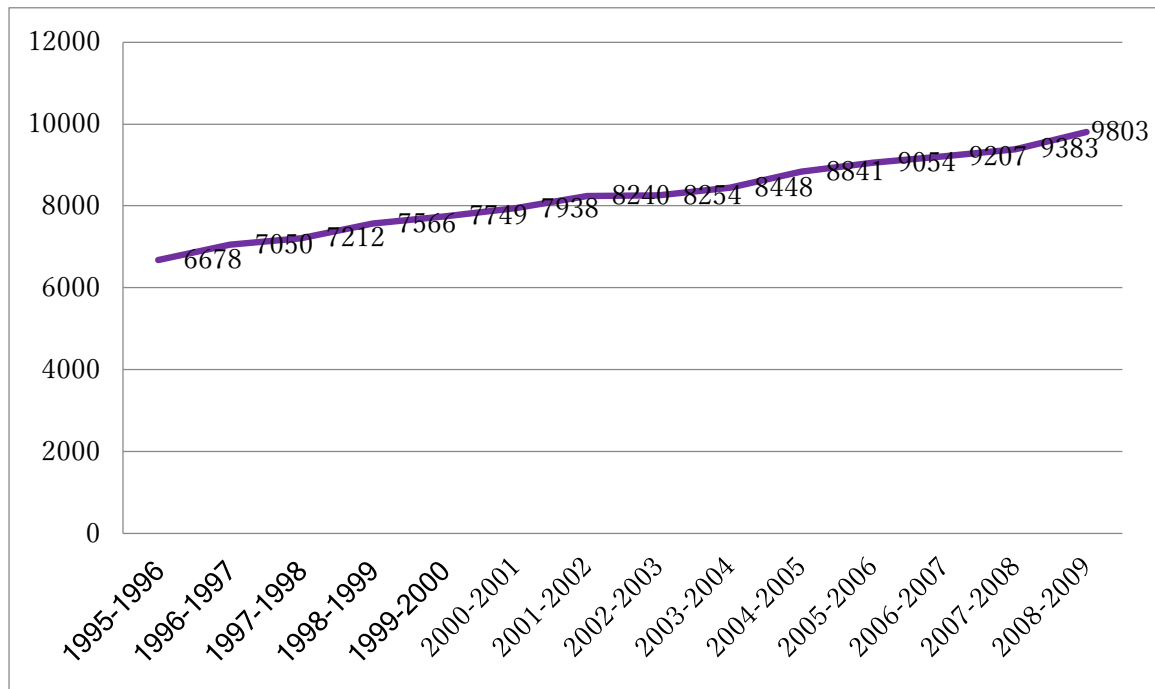


図 3-8 NCAA ディビジョンⅢ・女子サッカーの登録選手数の推移

さらに図 3-10 に示すように、ディビジョンⅢの全大学に占める女子サッカー部が所属する大学の割合は 1995 年に 78.4%だったのに対し、2008 年には 95.5%と増加しており、男子サッカー部が占める 90.1%を上回っていたことがわかった。

以上のように、この時期に全ディビジョンにおけるチーム数、登録選手数、大学全体に占める女子サッカー部の割合の全てにおいて増加していることがわかった。

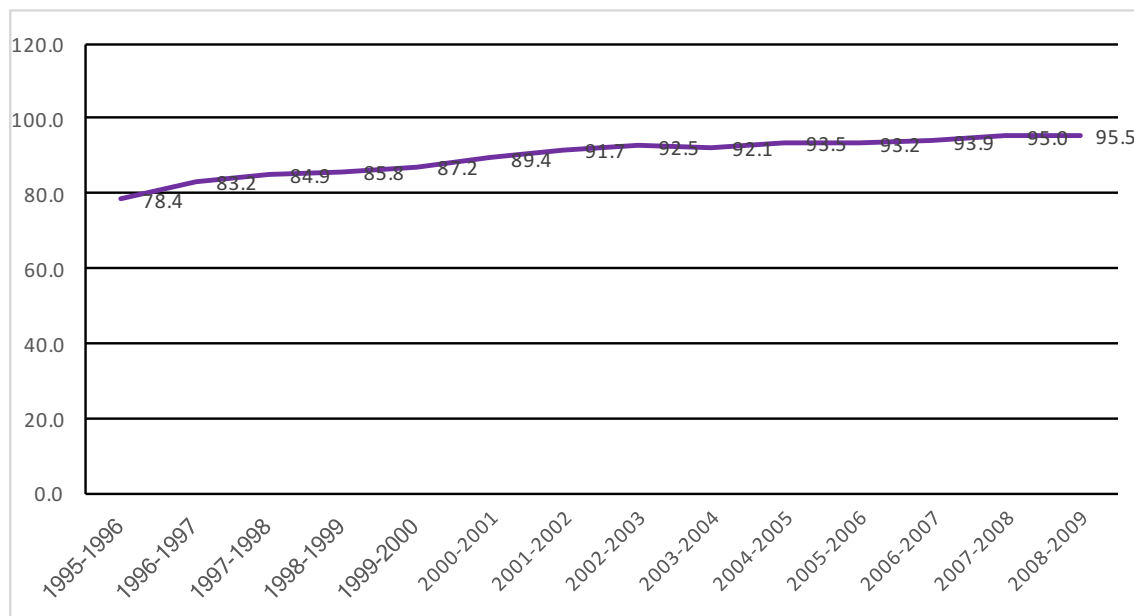


図 3-9 NCAA ディビジョンⅢ・女子サッカーのチーム割合の推移

3) ドーランス氏は1994年から代表監督から離れるが、その後も多くのノースカロライナ大出身の選手は代表に選出された。自国開催の1996年アトランタ五輪金メダル獲得と1999年女子W杯優勝から女子サッカーの認知度はさらに上がり、またミア＝ハムなどスター選が手生まれ、選手達の社会的地位も上がった。大学スポーツにおいても人気が向上し、NCAA チャンピオンシップの出場枠が2000年の48校から2001年には64校となり、たった一年間で16校増加したことがわかった。

4) ノースカロライナ大にNCAA 所属の多くのコーチが訪れて学び、練習法など各大学に伝わり全体の育成・強化が確立された。

第2節 NCAA 女子サッカー・チャンピオンシップの変遷

1) ドーランス監督をはじめとする他大学のコーチ陣の尽力もあり、第1回のNCAA 女子サッカー・チャンピオンシップは1982年に開催、2017年の第36回大会まで途切れることなく継続的に開催されてきた。トーナメントの開幕時期も試合の日程もほぼ毎年同じ時期に行われ、ディビジョンⅠの大学は約330校で32のカンファレンスに分かれてレギュラーシーズンを行う。その後は表3-3で示したように、8月にトーナメント戦が開幕、11月には第1から第2ラウンドを戦い、準々決勝、準決勝、そして12月に決勝戦が行われる。

表 3-3 2017 年 NCAA 女子サッカーのチャンピオンシップ日程表

トーナメント戦開幕	8月20日
レディース・カレッジ・カップ 第1ラウンド	11月10日、11月11日、11月12日
レディース・カレッジ・カップ 第2～3ラウンド	11月17日、11月19日
準々決勝	11月24日、11月25日
準決勝	12月1日
決勝	12月3日

その後カンファレンスで優勝したチーム 32 校とランキング上位 32 校の合計 64 校が、図 3-12 に示したようにトーナメント方式で試合を行う。全米最大の女子サッカーの大会のワンシーズンであり、NCAA 本部と各大学のアスレチック・ディレクター (AD) が連携を取りながら運営する方法が確立し、現在は定着している。

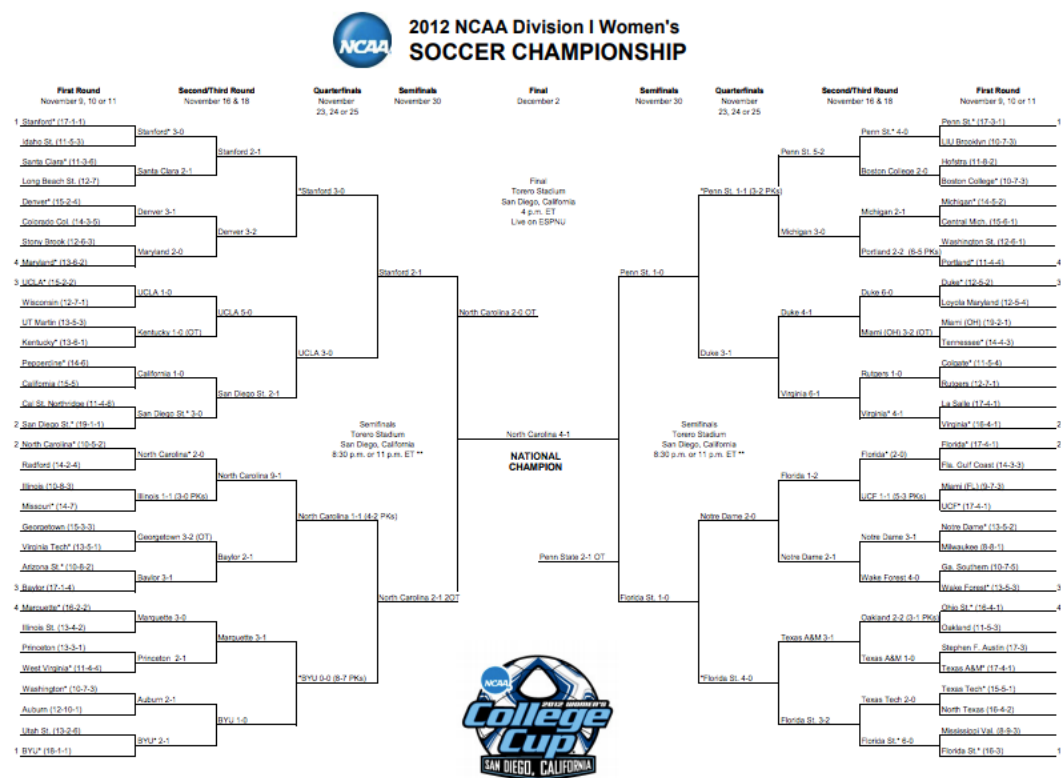


図 3-10 NCAA 女子サッカー・チャンピオンシップのトーナメント表

2) 1982 年から 2016 年の優勝回数では図 3-3 に示したがノースカロライナ大の 21 回が圧

倒的な数字で、以下ノートルダム大、南カリフォルニア大、ポートランド大と続いている。いずれも女子サッカーの強豪大学ですべて代表選手を輩出している大学である。

表 3-4 NCAA 女子サッカー・チャンピオンシップ優勝回数

	大学名	優勝回数
1位	ノースカロライナ大	21
2位	ノートルダム大	3
3位	南カリフォルニア大	2
3位	ポートランド大	2
5位	フロリダ大	1
5位	フロリダ州立大	1
5位	ジョージ・メイソン大	1
5位	ペンシルベニア州立大	1
5位	サンタクララ大	1
5位	スタンフォード大	1
5位	UCLA	1

ノースカロライナ大の結果は図ずば抜けているが、理由としては代表監督を務めたアンソン＝ドーランス監督の指導力、リクルーティング能力の高さにあるといわれている。ただ現在は 2012 年の優勝以来このタイトルから遠ざかっている現実があるが、それは各大学に優秀なヘッドコーチが所属するようになってきたのが要因の一つとされている。現在 NCAA 女子サッカーのチャンピオンシップはここ数年、毎年優勝校が変わるなど群雄割拠の時代となっていることもわかった。

他の強豪大学としては東地区で、アビー＝ワンバック選手を輩出したフロリダ大学、若手の中盤選手として有望なモーガン＝ブライアン選手を輩出したバージニア大学、それに続くデューク大学、ペンステート大学などがある。西海岸では、スタンフォード大学、UCLA、USC などがあり、それぞれチャンピオンシップの優勝経験がある。また、新興チームとしてはウエスト・バージニア大学などがあげられるが、他の大学でも多くの選手が育成されており、実力差が拮抗しているのが現地の調査からわかった。

第3節 NCAA 大学コーチと選手及び日本人関係者インタビュー

1) アンソン＝ドーランス氏/ノースカロライナ大・女子サッカー部ヘッドコーチ

Q ノースカロライナ大(以下、UNC)の女子サッカー部の取組みは、こういったものがあるのでしょうか。

A ・アメリカ代表は多くの結果を残しているが、女子サッカーの歴史はまだ新しいのです。私は70年代に女子サッカーの指導者になりましたが、当時から女子サッカーはElementary School(小学校)やMiddle School(中学校)で大変盛んでした。その次がHigh Schoolで、その少女たちが大学に入学して女子サッカー部を作り始めました。UCLA(1937年創部)のようなスペシャルケースを除くと、大学スポーツで女子サッカー部が数多く生まれた背景はここに 있습니다。よく「TitleIX」が話題になりますが、他の女子競技はわかりませんが、女子サッカーにおいて予算面の効果が出たのは90年代に入ってからです。サッカー少女たちが大学入学してからもプレーを続けたかった、だからサッカー部を作った。ノースカロライナ大(以後、UNC)もです。これが当時の大きな要因でした。

・1979年にUNCに女子チームが生まれました。当時、私は男子サッカー部と兼任で、(男子と)同じフォーメーション「4-4-2」でプレーしましたが、これが全く機能しませんでした。それから試行錯誤が続きました。最終的に「3-4-3」のフォーメーションを採用したのは、前線、中盤、守備のすべてのラインで個人の能力が鍛えられるからです。

・UNCの特徴はプレーにおいてはプレスの連続、つまりプレッシングサッカーです。試合の前半途中でGK以外のほぼ全員を交代し、また後半途中でも同じようにほぼ全員交代させますが、それは質の高いプレッシングサッカーをするためです。アメリカ人の身体的な特徴を最も活かしたプレーモデルだと考えます。

・プレー以外ではコミュニケーションを大事にします。女子の育成ではここが重要です。他の女子チームが内側から壊れるのを何度か見ました。現在、ほぼ全員が寮生活ですが、必ず2名から4名でシェアして暮らしています。個室は誰もいません。休日にもBBQやパーティーを行なっている。これは女子チームでは重要な点です。男子選手と同じように女子選手とコミュニケーション取っていたら、チームがうまく機能しませんでした。女子は試合や練習以外のコミュニケーションが重要です。

・UNCのチームは多くの評価を受けていますが、重視しているのはリクルーティングです。今も可能な限り直接高校へ行き、(高校の)ヘッドコーチから選手の話聞いています。それと「リクルーティング・キャンプ」を毎年開催しています。これは女子サッカーではUNCが最初に取り入れました。全米から生徒が集まり基本的に2泊から3泊します。NCAAには年齢についてのルールがあり、9th grade(14歳)の秋以前は直接本人と話してはダメで、ヘッドコーチを通して交渉することになっています。その年齢以降の選手を集めます。

・リクルーティングにおいて見ている部分は、一試合でどのくらいの距離を走るかは関係ない。それより短い距離のスプリント能力が重要です。ボールを奪うため、相手をかかわすためです。あとはフィジカルで、サッカーにおいて1対1は基本です。あと、他に評価しているのはコミュニケーション能力です。プレーを言葉で説明できるのも重要です。

Q どのような経緯で現在のコーチの役職に就きましたか。

A ・1976年からUNCの男子サッカー部の監督を務めていました。79年に数名の女子生徒からのリクエストを受けて女子サッカー部をつくりました。当時は女子サッカーにはあまり興味がなかったのですが、男子サッカー部との兼務としました。しかしトレーニングが始まると、練習からベストを尽くす女子選手に可能性を強く感じました。試合でも全力を尽くす姿勢が変わらない。この点には強く惹かれました。これはアメリカ代表のメンバーと同じでした。

・2017年から（大学より）下の年代の才能開発を目指すGDA(Girls Development Academy)を主催して、全米を回っています。かなりの数のスポンサーも付いています。リクルーティングだけでは発掘出来なかった才能を開発し、優れた女子サッカー選手の育成を目指しています。これは今後のライフワークとなるでしょう。

Q キャンプや合宿などの取り組みはどのような内容でしょうか。

A リクルートキャンプはありますが、年に一度か二度あるだけで特別なことはしていません。

Q リクルーティング(選手のスカウト)で全米ネットワークはどのように形成されていますか。また、こういった基準で選手を採用していますか。

A 直接高校に行くことや各州の大会を見に行く事は重要です。選手と直接コミュニケーションを取ることが大事です。私は選手のデータと直接会う事の両方が大事だと思いますが、女子選手はピークが遅い場合もあるので、注意して見る必要があります。同時に「リクルートキャンプ」も開催していますが、参加選手は私と数名のアシスタント・ディレクターで選考しています。

Q 「TitleIX」は女性選手に機会均等を与えたと思われますか。この法律が女子のカレッジスポーツにどのような影響を与えたと思われますか。

A もちろん多くの良い影響を与えたと思います。そうでない面も現実的にはあると思います。予算面で女子スポーツに手厚くなり、その代わり潰れた男子スポーツ部が300以上もあると言われているのです。男子サッカー部はないが女子サッカー部は存在する大学もある。他の男子競技でも同じようなことが起きています。それを平等と言えるのかどうかどううか、検証の時期にきているのではないのでしょうか。これは大変難しい問題です。

現実的に女子サッカー部がこの法律をうまく利用できたのは 90 年代以降です。1990 年、アラバマ州の大学で TitleIX を使い、女子サッカー部を創部したのです。その方法が多く大学の大学に伝わりました。それ以前、大学での女子サッカーは女子バスケットボールやソフトボールより競技人口が低く、マイナースポーツで人気がありませんでした。あくまで少女のスポーツでした。今年(2017 年)は法律が制定されて 45 年が経過しました。先日も ESPN で振り返り番組を見ましたし、関係する記事も読みましたが考え直す点が多いです。ただ、女子サッカーは確実に恩恵を受けてきたのは間違いありません。

Q 今後のキャリアをどのように積み上げていこうとお考えでしょうか。

A 当初、同大学の男子サッカー部の指導者でしたが、女子の指導者になり約 40 年が経ちました。その期間にアメリカ代表監督にも就任(1986 年から 1994 年)しました。40 年前は大学で女子サッカーは盛んではなく、全米規模の大会も AIAW(Women for Intercollegiate Athletics for Women)しかありませんでした。そこで 1981 年、女子サッカーを正式競技に認めてもらうよう NCAA に再三要求しましたが、当初は全く認めてもらえませんでした。そこでクリス(=リドストーン氏/当時コロラド大学女子サッカー部コーチ)と一緒に当時の NCAA に対し提案して何度も話し合っ、ようやく認めてもらいました。翌年のチャンピオンシップ開催も約束してもらいました。今後は大学より下の年代の育成に力を注いでいきたいです。

Q アメリカの大学女子サッカーが現在抱えている課題は何でしょうか。

A ・リオ五輪や(2017 年に)アメリカで開催されたネーションズカップ(四カ国対抗戦)を見ても、以前ほど勝てなくなっています。試合の内容もよくない、攻撃面だけでなく守備面も課題が多いです。私が指揮した第一回女子 W 杯から基本的にプレースタイルが変わっていませんが、今は根本的にチェンジする機会なのかもしれません。

・私は日本の女子サッカーをリスペクトしています。スピード、テクニックがあります。ディジョンメイキング(判断力)が遅いのが課題ですが。数年前 JFA アカデミーに所属していたマホ＝ハシヌマ(橋沼真帆・エルフェン埼玉所属)は 3 つの要素すべて揃っており、UNC に入学してもらうため交渉しましたが、うまく纏まりませんでした。問題は彼女の英語力が一定のレベルに到達していなかったからです。これは今後の日本人選手の課題ではないでしょうか。

2) クリス・デューカー氏/ノースカロライナ大・女子サッカー部アシスタントコーチ

Q 最近のノースカロライナ大の女子サッカーの取組みについてどういったものがあるか。

A 70 年代にアメリカの大学女子サッカーは始まったといわれています。当時は NCAA ではない団体が女子サッカーを統括していましたが、UNC は創部から大会に参加していました。女子サッカー部の歴史はまだ長くはありません、最も長いのは多分 UCLA でしょう。

リクルーティング、練習法、チームビルディングなどが評価されていますが、個人的には評価すべきはコミュニケーションだと考えています。

Q どのような経緯で現在のコーチの役職に就いたか。指導者育成ではどのようなメソッドや育成組織から学んだか。

A 特にコーチのためのプログラムがあるわけではありません。ただ、今の新しいコーチは男子チームで経験を積んだり、ヨーロッパのクラブで経験してきたなど以前にはなかった特別なキャリアの人が増えています。彼らは学んだ最先端の理論を普段のトレーニングに活かしています。同じカンファレンスのバージニア大学はアンダー世代の代表監督を招聘して急成長しています。これがチャンピオンシップなどの結果に現れています。

Q キャンプや合宿などの取り組みはどのようになっていますか。

A 年に一度か二度あるだけで特別なことはしていません。幾つかのグループに分かれて共同生活をさせますが、これも日頃の寮での生活と同じです。

Q 地域の育成組織や街クラブとの交流はどのようになっていますか。

A 創部された時は地域の高校とも交流があったようですが、今は難しいです。サッカーと一緒にプレーしてもレベルが違います。

Q リクルーティング(選手のスカウト)で全米ネットワークはどのように形成されていますか。また、どういった基準で選手を採用していますか。

A 直接現地に行く、直接プレーを見る、直接選手と話す。これが原則です。ただ今はリクルートキャンプが主流ですが、いい選手がいると聞けば直接見に行きます。どこを見ているかはデータを見る場合と目つきやコミュニケーション能力で判断する場合があります。数値的な部分と直感的な部分の両方の判断が必要です。詳細は教えることはできませんが、例えば長い距離を走る能力より瞬発的な能力のほうがサッカーでは必要です。女子の場合は才能が発揮されるタイミングが年齢的に遅い場合があります。ここも注意深く見る必要があります。

Q 毎年 NCAA が行っているリクルーティングのテストについてどう思うか。

A 毎年テストはありますが、80%以上のポイントを取らないと合格しませんし、再試験があります。主に倫理的なことや一般常識が質問されます。私も毎年テストを受けていますが、クリアしないと1年間リクルーティング活動が出来ないのです。それくらい NCAA のルールは厳しいですし、リクルーティングに力を入れています。

Q 「TitleIX」は女性選手に機会均等を与えたと思いますか。また、この法律が女性のカレッジスポーツ全体にどのような影響を与えたのでしょうか。

A そう思います。法律ができて45周年となりESPNでも振り返る番組がありましたが、この法律が施行される以前の環境はかなり酷かったと思います。そもそも女子サッカーが競技として認められていなかった。今では信じられない話です。女子サッカーは確実に恩恵を受けています。

Q 今後のキャリアをどのように積み上げていこうとお考えでしょうか。他の大学やチームからのヘッドハントはあるのでしょうか。

A 私は他の大学へ行くことを考えたことはありません。UNCは女子サッカーのパイオニアです。歴史は短いですが手に入れたタイトルはアメリカの大学で一番多い。最高の指導者であるドーランス・ヘッドコーチ(HC)もいます。最高の場所だと私は考えます。

Q アメリカの大学女子サッカーが現在抱えている課題は何でしょうか？

A リオ五輪の結果に満足している女子サッカー関係者はいないでしょう。夏にアメリカで開催されたネーションズカップ（四カ国対抗戦）も勝てなくなっています。これはドーランス HC の口癖ですが、サッカーは決して「オーバーストラクチャー」になってはいけません。約束ばかりのサッカーでは選手は育ちません。「自分で考えて、自分でゲームを変える」、これはノースカロライナ大のサッカーの指導では何度も話している言葉です。この言葉にポジションは関係ありません。

3)サム＝デサンティス選手/GK・アメリカ国籍/ノースカロライナ州・ヒッコリー＝セント・スティーブンス高校出身

Q ノースカロライナ大の女子サッカーの取組みについてどういったものがあるのでしょうか。

A ・自分のポジションはGKですが、専門のGKコーチがいて細かく指導してくれます。今でこそ大学の女子サッカーではGKコーチがいますが、UNCでは80年代にはすでにいたそうです。かなり珍しいと思います。そういったようにUNCは他の大学にはない取組みをいち早く取り入れているのが特徴ではないでしょうか。

・私の場合は同州の出身ですが、子供の頃からサッカーをしていてUNCの女子サッカー部に入るのが目標でした。アメリカでサッカーをプレーする少女は、どこかのプロチームでプレーすることを目標にしておらず、特定の大学女子サッカー部でプレーすることを目指している人が多いんです。プロリーグは突然活動を休止したり、破産したりしてあまり信頼がないのです。

Q リクルーティングでの採用でしたでしょうか。

A そうです。同じ州なので高校の時に練習には何度も参加していて、そこでアシスタントディレクターに声をかけてもらいました。リクルートキャンプには参加していません。今シーズンの選手全員がリクルーティングによる採用です。

Q 「TitleIX」は女性選手に機会均等を与えたと思いますか。また、この法律が女性のカレッジスポーツ全体にどのような影響を与えたと思いますでしょうか。

A そう思います。ただ、時代に合わない部分もあるかと思います。そういったニュース記事を見たことがあります。予算面での女子スポーツへの配慮は、この法律が根拠となっていますが、変更すべきところは変更した方がいいと考えます。

Q アメリカの大学女子サッカーが現在抱えている課題は何でしょうか？

A アメリカの大学サッカー全体は分かりませんが、UNC は 2012 年の優勝から一度もファイナリストになっていません。プレーモデルなどチェンジする時期に来ているかもしれません。どんなモデルがいいかは難しい質問です。日本のような(パスを主体とする)サッカーをもっと学んでもいいと思います。

Q 卒業後はどのようなビジョンをお持ちでしょうか。

A 可能であればプロ選手のキャリアを進みたいですし、代表のチャンスがあれば挑戦したいです。これは簡単なことではないでしょう。ただ、どのチームでプレーするにしても、「自分で考えて。自分で試合を変える」選手になりたいです。GK であってもです。

4) ロッテ・ウォーベン・モイ選手/DF・イギリス国籍/イングランド・ロンドン/ストーク・ニューウイントン高校

Q ノースカロライナ大の女子サッカーの取組みについてどういったものがあるでしょうか。また、イギリス人から見たアメリカ女子サッカーの意見も聞かせて下さい。

A ・UNC はイギリスでも大変評価が高い大学です。チャンピオンシップの結果、また多くの代表選手を輩出している点も評価できます。意外だったのは、練習がフィジカル重視で目新しいものが特になかったことです。

・最も大事なのはコミュニケーションだと何度も言われました。練習や試合以外の時間も選手と一緒に過ごす時間が多いです。ドーランス監督の指導方針ですが、正直私は好きではありません。試合やトレーニングが終わったら、出来るだけ自分の時間を過ごしたいです。

・イギリスはロンドン五輪が決まってからチーム GB(グレートブリテン)として統一チームの強化が始まりました。でも、女子はロンドン五輪でベスト4 までいきましたが、それ以上の結果は今も出せていません。イギリスで女子サッカーは未来のスポーツなんです。全てはこれからです。環境も良くないですし、アメリカや日本の方がいいと思います。

Q 「TitleIX」は女性選手に機会均等を与えたと思いますか。また、この法律が女性のカレッジスポーツ全体にどのような影響を与えたと思いますでしょうか。

A 私はイギリス人なので外国の法律です。こういった素晴らしい環境でプレーできる根拠になっている法律だと聞いています。イギリスではスポーツの面での男女の平等は、まだまだ課題があります。

Q アメリカの大学女子サッカーが現在抱えている課題は何でしょうか？

アメリカの大学サッカー全体は分かりませんが、UNC は 2012 年の優勝から一度もファイナリストになっていません。プレーモデルなどチェンジする時期に来ているかもしれません。どんなモデルがいいかは難しい課題です。

Q 卒業後は、どんなビジョンをお持ちでしょうか。

A 私は元陸上競技のアスリートでした。でもそちらではなく、アメリカのプロリーグか、あるいは以前所属していたアーセナル・レディースに戻りたいと考えています。勿論、イングランド代表にも選ばれたいですし、いつかアメリカ代表と対戦したいです。ロンドン五輪前からイギリスはサッカー男子・女子代表の、特に育成に力を入れています。特に男子はインドでの U-17 ワールドカップで優勝しました。イングランドのユース年代は成長が著しいです。男子は今年(2017 年)の夏、U-20 ワールドカップと U-19 欧州選手権でも優勝を実現しました。これは歴史的な快挙です。

育成の中心地には「セント・ジョージズ・パーク」という、サッカー少年や少女たちのトレーニングの場所があります。「セント・ジョージズ・パーク」はイングランド中部にある FA 所有のトレーニングセンターで、プレミアリーグの下部組織で「EPPP（エリート選手養成プログラム）」というプログラムが導入されています。近い将来、イングランド女子代表もアメリカ代表と同じくらいの結果を出すと信じています。

5) イマイズミ モリナオ氏 / フロリダ州立大学女子サッカー部・アシスタントディレクター

Q ドーランス監督や UNC のサッカーにはどういった印象を持っていますか。

A ドーランス氏はとても気さくでジェントルマンです。素晴らしい指導者で、アメリカではレジェンドでもあります。あれだけの実績があるのに決して偉そうにしない。

サッカーコーチとして、彼のコンセプトは基本的にプレッシングサッカーです。「3-4-3」をベースとしたスタイルでオートマティカルにプレーをします。2012 年の頃まではズバ抜けた選手が集まっていました。その頃対戦した記憶では、スピード、テクニックに優れた選手が多かったという印象です。その選手たちが 90 分間プレッシングサッカーを展開してきます。現在も同様のプレースタイルですが、選手の質が均一化されてきているよ

うに感じています。他の大学のプレーや指導者の質が上がってきているからで、現在のアメリカ大学女子サッカーは群雄割拠の時代に入っています。

Q NCAA の女子サッカーと日本サッカーの違いは何でしょうか。

A 違いが多くて最初は驚いてばかりでした。カレッジリーグのルールと FIFA ルールが異なっているのですが、最も違うのは選手の交代に関してです。前半 1 回の交替可能。後半は再びリセットされてリエントリーがもう 1 回可能です。つまり A と言う選手が前半 25 分プレーして交替。後半再びスタートで出場し 20 分プレーして交替。10 分休んだ後、残り 15 分再びプレーすることが可能なのです。このルールを活用して 7 人から 8 人一気にチェンジしてプレーするチームもあります。まさにノースカロライナ大がそうなのです。最初は違和感しかありませんでしたが、現在は育成や普及の合理的な方法だと考えるようになりました。出場機会なくして育成の機会なし、を最も合理的に進めているのがアメリカの大学サッカーなのではないでしょうか。だから強いですし、そこから生まれる代表選手も国際大会で結果を出しています。

Q 現在の NCAA 女子サッカーの現状はどういったものなのでしょうか。

A 各大学によって様々な特徴があります。例えば私が勤めるフロリダ州立大ではスポーツにデータサイエンスを用いています。2017 年からストレングス&コンディショニングコーチが新しくなり、GPS とリカバリーサイエンスを選手のコンディショニングに利用しています。GPS はご存知だと思いますが、Catapult 社のものを採用しています。リカバリーサイエンスは Whoop 社のものを採用しています。

コーチ自身の主観的分析とデータサイエンスによる客観的分析の両方を用いてコーチングに取り組んでいます。

Q 「TitleIX」の女子サッカーへの影響はどのようなものなのでしょうか。

A 大いにあると思います。特に予算面でそれを感じます。私の大学の女子サッカー部のアウェイ戦の移動は毎回チャーター機なんです。信じられますか？ その反面、同大学には男子サッカー部がありません。夏季五輪の種目であるバレーボールも女子部はありますが、男子部はありません。男女スポーツの予算面でのバランスではいろいろと考えさせられます。このあたりは日本にあまり伝わっていないと思います。

また、「TitleIX」のレクチャーは年に 1 回全てのアスレチック・デパートメントに関わる、全てのコーチを集めて行われます。その内容は大学におけるタイトルIXの扱い、担当者、組織、さらに男女の教育の機会均等に関しての達成率、セクシャル・ハラスメント、バイオレンスについて、また観たり聞いたり被害にあった際の連絡先などの提示など約 1 時間ほど行われます。さらに、大学内に「コンプライアンス・デパートメント」という部

署があり常に目を光らせています。各チスポーツチームの活動が NCAA のルール通り活動しているかどうかなど、いつもチェックしています。

Q リクルーティングの現状を教えてください。

A リクルーティング活動はアメリカの大学女子サッカーで最も重要視している部分です。全米は広いので移動のコストもかかる。そこで「リクルートキャンプ」といって全米の9年生以上の女子高生が一つの大学に集まって、合宿のように練習や試合を通してコーチ陣が才能を見抜いていく方法です。

リクルーティングは定期的にコーチの勉強会があり、コンプライアンスの担当者が変更点についてレクチャーします。また、年に1回リクルーティングのテストがあり80%以上を取らないと学校外でのリクルーティング活動が一切出来ません。合格するまでテストを受けます。一度不合格になると1ヶ月後に再受験です。NCAA の Web でプラクティステストを受けることが出来ます。

6) ウメハラ マキ/ UCLA 女子サッカー部選手・MF

Q NCAA 女子サッカーの特徴的な取組みは何ですか。

A ・文武両道であることです。いくらスポーツが上手くても、大学はあくまでも学校なので学業を怠ることは許されません。日本の学校と決定的に違うところです。GPA がある程度ないと次のシーズンで謹慎させられます。つまりスポーツが一切出来ない。ただし、アスリート専用の Study Session(補講のようなもの)があり、学校側からのサポートも手厚くなっています。理念として学業の上でのスポーツ、これが NCAA なんです。ここが分からないとアメリカの大学スポーツの強さも分からないと思います。

・Transfer ができることです。Eligibility(資格など)の問題がありますが、アメリカ全体において大学間の転校は珍しくありませんし、スポーツにおいても同じことが言えます。日本で例えるなら早稲田大から慶応大に「移籍」することが可能です。ちょっと信じてももらえないかもしれませんが。ある意味、プロリーグの移籍のようなものです。レベルの高いチームであまりプレー時間がもらえない選手が他の大学に転校して大活躍するケースもあります。コーチたちは高校生のみでなく、他大学の現役選手のリクルーティングも手掛けています。

・Team Bonding を大切にします。日本に比べて選手数が少ないので(UCLA は4学年合わせて27人)、選手とコーチ間のコミュニケーションを重視します。シーズン後に毎回選手ひとりひとりと個人面談をすることで、お互い思っていることを伝えることができチームの向上につながります。

もちろん、選手同士での繋がりも大切にします。チームで食事へ行ったり、activity をします。選手同士でルームメイトになることが多いので、シーズン中は四六時中一緒にいるので、プレー中もチームワークがよく出るようなシステムになっています。

Q ノースカロライナ大の活躍やプレーをどう見ていますか。

A アメリカの強豪大学の一つです。いろんな意味でアメリカの女子サッカーのスタイルや強化の方法を確立した大学です。でも、今年のシーズン(2017 年)のチャンピオンシップの決勝戦がスタンフォード大対 UCLA だったように、アメリカの大学女子サッカーの勢力も変わりつつあるように感じています。

Q どのような経緯で入部されましたか。

A セレクションで入部する選手はほとんどいません。現在私の知っている範囲ではセレクションで入部した選手はいません。私もそうですが、ほとんどが高校生の時にコーチにリクルートされた選手ばかりです。

Q 指導者のレベルはどうでしょうか。

A NCAA Division I のコーチはかなりの実力者です。元代表経験のあるコーチも少なくありません。ヘッドコーチ(監督)のレベルがチームのレベルに繋がるので、レベルは相当高いです。試合直後にビデオを分析して次の日にミーティングをしたり、相手チームのスカウティングを行ったりしています。シーズン中は週二回試合があるのでかなり忙しいのですが、アシスタントコーチも含め専任です。オフシーズンにキッズのコーチをするアシスタントコーチもいます。

Q 自身の体験を通してアメリカの大学女子サッカーの良さは何でしょうか。

A 私はサッカーと同じくらい勉強をしたかったので、両方ができる環境に自分を置きたくアメリカの大学に進学しました。サッカーは楽しいですがプロになったとしてもプレーできる年数は限られています。その後の人生も考えて大学での勉強ができるという点を重視しました。また、大学女子サッカーの良さは特に年齢が同じくらいの人との距離が近いということです。大学のサッカー部でないと、このように一日中サッカーや勉強のことを分かち合うのは難しいと考えます。

7) 高倉 麻子/なでしこジャパン監督

日テレ(読売)ベレーザ出身。2000 年に WUSA リーグ(当時のプロリーグ)シリコンバレー・レッドデビルズでプレー経験

Q NCAA 女子サッカーの特徴的な取組みは何でしょうか。

A 2000 年、怪我もあったので実質プレーできた期間は数ヶ月ではありましたが、アメリカのプロリーグに所属していました。実は練習場所がクラブの近くにあったスタンフォード大学のピッチを借りていたんです。「夏季五輪がここで全て開催できる」という大学関係者の言葉どおりで、施設や環境の良さに本当に驚かされました。指導者のレベルも高い。

日本でもこういった環境が実現すれば、女子サッカーが根本的に変わると思いました。

Q その頃のノースカロライナ大の活躍はどうでしたか。

A 強豪校でした。アメリカ代表を初めてW杯で優勝させた監督がチーム率いています。アメリカは代表で結果こそ出していますが、女子サッカーの歴史ではまだ新しい国です。そんななか、チームのスタイルや育成の方法を確立した学校と聞いています。

Q アメリカの女子サッカーの秘訣は大学サッカーと言われています。実際に現地で見られてどう思いましたか。

A 間違いないと思います。日本では長い間、中学生年代の育成が課題と言われていて、勿論それも凄く大事なのですが、18歳から21歳までの育成年代も同じくらい重要です。

Q 日本での大学サッカーの取組みについては、どう変えていけばいいでしょうか。

A 日本代表監督に就任して思ったのは、選手の課題の一つはテクニックです。U-17など下の年代の育成のうまさは定評がありますが、18歳から21歳の育成はこれからだと感じました。大学スポーツはまだまだ伸び代があるし、今後は重要になってくるでしょう。大学スポーツの取組みは、日本の女子サッカーの今後の発展にとって鍵を握っています。

Q 日本版NCAAN創設へ向けた動きが活発にですが、どのようにお考えでしょうか。

A いくつかの課題がクリアになれば、個人的には賛成です。2018年シーズンからなでしこリーグの1部に「日体大FIELDS横浜」が昇格し、大学女子サッカーが注目を浴びています。こういったチームがどんどん出てきて欲しいです。私も大学チームの試合の視察にはよく行きますが、施設や環境も充実しているし、学びの機会もあります。日本では公立・私立の小中高大学が全スポーツ施設の約60%を管理しているといえます。そこを使わないのは本当に勿体ないです。日本もそういった面から、大学スポーツが女子サッカーの発展にとって重要だと考えます。

8) マーク＝エマート氏 / NCAA(全米大学体育協会)会長

Q NCAAが存在する理由や意義は何でしょうか。

A NCAA誕生は今から約100年前、セオドア＝ルーズベルト大統領時代の頃です。当時、アメリカンフットボールの活動において19名もの選手においてプレー中の死亡事故が発生しましたが、これが発端です。そこから選手の健康と安全を守るべく設立されたのがNCAAです。設立当初からNCAAが最も重視しているのは3つの点です。

①大学スポーツは大学教育の一環である

②ルールやレギュレーションに基づき、すべての面で公平かつ公正である

③すべての学生選手の健康と安全を守る

100 年前、アメフトでの死亡事故が多発した際にワシントンに関係者が一堂に集まったのですが、日本でこの話をする多分アメフトのヘッドコーチ(監督)やアシスタントコーチが集まったと思うでしょう。それは違います。大学の学長・総長が集まったのです。これが NCAA で最も大事にしている部分で「大学スポーツは大学教育の一環」なのです。この理念があるから発展してきたのです。この理念があるから 100 年続いてきたのです。

Q ビジネス面でも成功していますが。

A NCAA はビジネスとしても成功し、現在のように多くの収益を上げるようになったのは 100 年以上の歴史を積み上げるなかで徐々に生まれた産物です。もちろん問題もあり、それらは一つずつ解決しています。ただ、日本版 NCAA が創設されても、すぐに多くの収益を上げることはできないでしょう。アメリカの NCAA を真似るのではなく、私達の全くのゼロから現在に至るまでの過程を是非学んでもらいたいです。まずはしっかりとした理念が必要ではないでしょうか。

Q 1982 年からスタートした女子サッカーのチャンピオンシップについてどう思われますか。

A NCAA において女子サッカーが発展するきっかけは 1982 年にチャンピオンシップが開催されたことです。アメリカ全体の女子サッカー発展を考えても、この大会開催の意義は大きい。開催当初は 10 校あまりの参加だったと思いますが、現在は 64 校です。今後も成長し続けていくでしょう。そこには NCAA の理念があるからです。例えばですがチャンピオンシップのベスト 4 から大会の名前が「カレッジ・カップ」となりますが、試合前日には 4 つの大学によるパーティー(前夜祭)があり、表彰式が開催されます。サッカーの得点王を讃えるのではなく、各大学の学業の成績優秀者が表彰されます。これが重要なのですが、多分日本の大学関係者は「学業」と「スポーツ」を別々に考えているのではないのでしょうか。それでは今以上の発展はないでしょう。サステイナブルな大会運営や大会の成功を考える上で、基本理念が絶対に必要となります。日本で大学スポーツを成功させたいければ、まずこの点を大学関係者が真剣に考える必要があります。これはヘッドコーチが考えることではありません。

第4章 考察

本章では研究結果から得られた知見を整理し、ノースカロライナ大がNCAA女子サッカーの競技力アップに、またチャンピオンシップのリーグ運営にどのような影響を与えたかも考察していく。

また、ノースカロライナ・女子サッカー部の歴史の変遷において、NCAAチャンピオンシップの創設 他大学に先駆けての様々な取組みからチャンピオンシップ最多優勝21回を達成した。NCAA女子サッカーだけでなく、またアメリカ女子サッカー全体にどのような影響を与えたかを考察した。

第1節 NCAA女子サッカーの競技力向上への影響

1) ノースカロライナ大・女子サッカー部のドーランス監督らの提案によって、1982年に実現したNCAA女子サッカー・チャンピオンシップの初開催を境に、全米大学における女子サッカーの競技人口は拡大していったことがわかった。図4-1に示したが、女子サッカーの場合は1972年「TitleIX」の制定以降も横ばい傾向、また1991年の女子W杯以前から増加傾向があり、競技人口拡大においてチャンピオンシップ開催の影響があることがわかった。また、NCAAにおいて女子サッカーという競技がチャンピオンシップを機に認知度向上をしていったと考えられる。

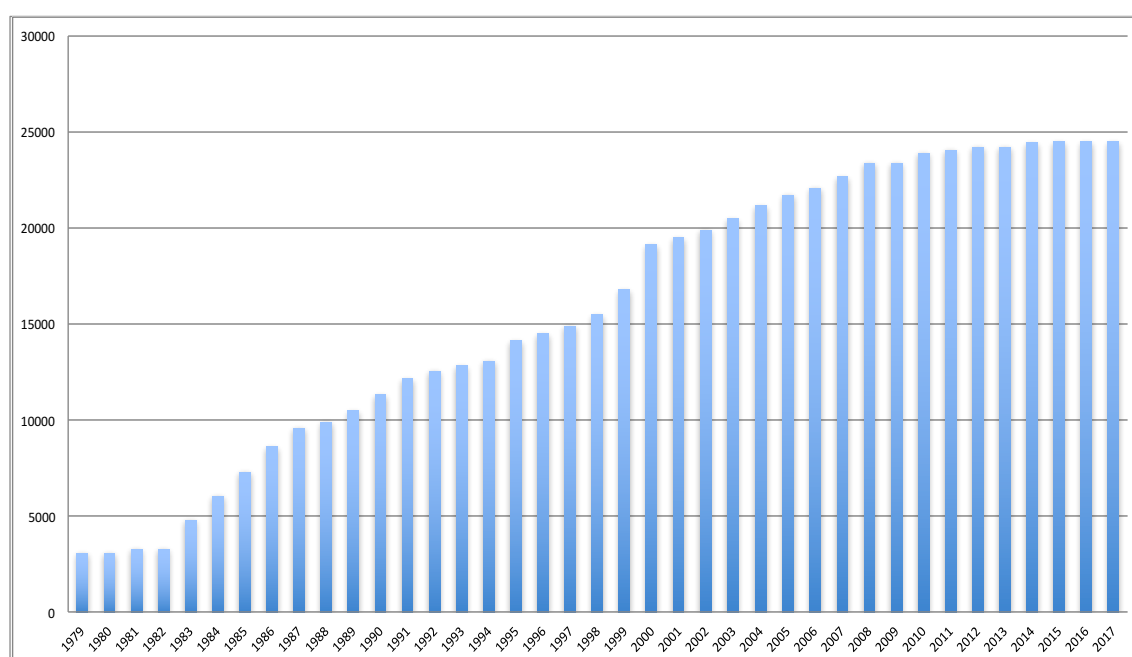


図 4-1 NCAA全ディビジョンにおける女子サッカーの選手登録数の変遷

2) 表 4-1 に示したが、NCAA 全ディビジョンに占める女子サッカー部が所属する大学の割合は 1995 年に 63.2%だったのに対し、2008 年には 89.7%と増加している。NCAA 全体の約 9 割の大学に女子サッカー部は存在しているが、これに対して男子サッカー部は 1995 年に 67.9%であり女子より多かったが、2008 年には 72.7%であり女子サッカー部のほうが上回っていることがわかった。

表 4-1 NCAA 女子サッカー・全ディビジョンの統計

年度	メンバー	チーム	全大学での割合	アスリート数	チーム平均メンバー数
1995-1996	998	631	63.2	13679	21.7
1996-1997	994	694	69.8	15106	21.8
1997-1998	985	724	73.5	15983	22.1
1998-1999	1031	790	76.6	17504	22.2
1999-2000	1041	811	77.9	18188	22.4
2000-2001	1039	851	81.9	19141	22.5
2001-2002	1036	868	83.8	19467	22.4
2002-2003	1033	879	85.1	19871	22.6
2003-2004	1039	895	86.1	20437	22.8
2004-2005	1045	913	87.4	21126	23.1
2005-2006	1062	930	87.6	21709	23.3
2006-2007	1064	941	88.4	22077	23.5
2007-2008	1070	956	89.3	22682	23.7
2008-2009	1069	959	89.7	23357	24.4

3) ノースカロライナ大の取組みが全米の各大学に伝わり強化の仕組みが確立され、競技力も上がった。また、アメリカ女子代表の歴代のほとんどの選手が大学サッカー部の経験者であるが、なかでも代表選手を最も多く育成したのはノースカロライナ大であり、NCAA 女子サッカーへの競技レベルアップへの影響があったと考えられる。

第2節 NCAA チャンピオンシップ運営への影響

1) 女子プロサッカーリーグは二度にわたる倒産や休止(WUSA が 2003 年、WPS が 2011 年)になり、継続的なリーグ運営が出来なかった。試合をする機会や練習の機会を失った選手も多く、海外のリーグへの移籍を強いられた者も少なくなかった。そんな状況でも常に新しい選手が生まれた要因の一つとして、NCAA チャンピオンシップなどの大会等が継続して運営され、若手の選手が多く輩出されてきたことがわかった。

2) チャンピオンシップの運営面では大学のコーチ陣は FIFA とは違う NCAA 独自ルールを提案して確立した。例えば選手交代における人数制限の自由や延長戦を設けたことにより、試合の出場機会が増え全体の強化に繋がった。このことにより、ノースカロライナ大は NCAA 女子サッカー・チャンピオンシップの運営へ影響があったと考えられる。

3) 育成や強化を重視したノースカロライナ大は優勝を重ね知名度も上がり、リクルーティングの面では多くの優秀な選手が大学に集まることになった。また数多くの優秀な代表選手が育ち、五輪やW杯で優勝など好結果をだし、普及拡大や更なる競技レベルも上がるという、図 4-2 で示したように好循環を生んでいった。その中心には「大学スポーツは大学教育の一環」とあるという NCAA の理念があることもわかった。

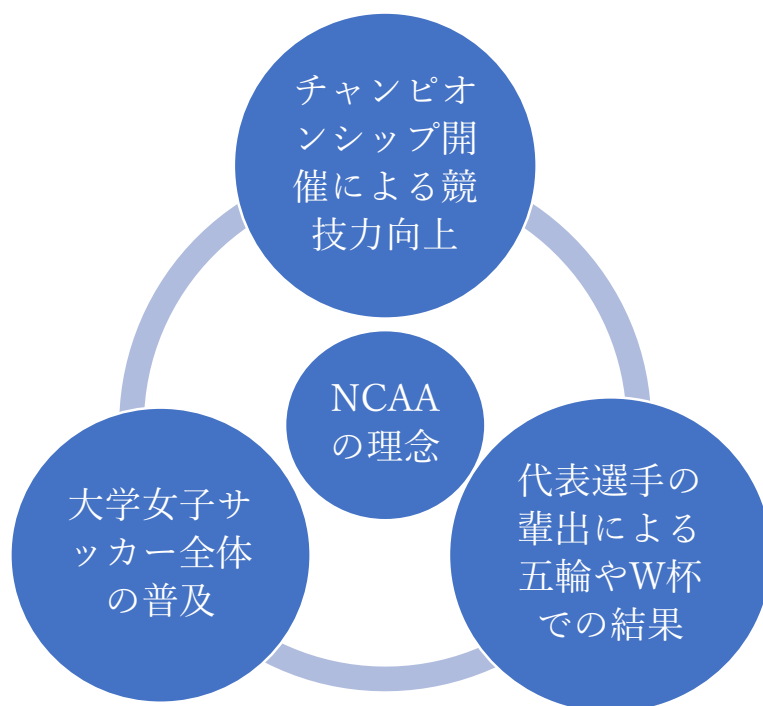


図 4-2 NCAA チャンピオンシップ開催による好循環

第3節 アメリカ女子サッカーの育成年代への影響

1) ドーランス氏またデューカー氏のインタビューから、アメリカの女子サッカーの基盤は、Elementary School(小学校)、Middle School(中学校)、High Schoolでの競技者である。彼女らが大学に入学して女子サッカー部を各大学で作った。NFHS(National Federation of State High School Associations/米国州立高校協会)での登録者数の正式な数字がわかるのは70年代に入ってからである。小中学生については70年代も正確な競技者数は分らないが、教育機関から委託された地域クラブでプレーしてきた。

2) 女子競技に多大な影響を与えた「TitleIX」だが、女子サッカーでは1990年代に入ってからであった。さらに1991年の女子W杯優勝で人気を決定付けるが、プロリーグの発足が遅れ、かつ経営に失敗したため、育成年代と代表をつなぐのは大学サッカーだった。そのため地域クラブなどでプレーする少女たちにとっての目標は、大学女子サッカー部でプレーしてアメリカ代表を目指すというものとなった。

3) 2013年、アメリカの女子サッカー・プロリーグであるNational Women's Soccer League(NWSL)が開幕し現在に至っている。3度目のプロリーグで人気定着に尽力しているが、現在も女子選手のほとんどが大学サッカーを経由してプロリーグか、海外のリーグへ移籍する場合がほとんどである。アメリカの大学女子サッカーは育成年代に多くの機会を与えているだけでなく、アメリカ女子サッカー全体の強化の面で貢献していると考えられる。

第4節 NCAA 大学女子サッカーの取組みとノースカロライナ大

NCAA 大学女子サッカーの取組みについては、マーク＝エマート会長へのインタビューから、以下のことがわかった。

1) NCAA の大学スポーツは以下の3点が原則である。

- ① 大学スポーツは大学教育の一環である。
- ② ルールやレギュレーションに基づき、すべての面で公平かつ公正である。
- ③ すべての学生選手の健康と安全を守る。

特に重要なのが、大学スポーツが大学教育の一環であることが、基本理念になっていることがわかった。ドーランス氏ははじめ女子サッカーの現場を知るコーチ陣の情熱と行動力、NCAA の理念が一つとなったのが現在のチャンピオンシップである。その運営に両者の経験や価値観が活かされていると考えられる。他の大会と違い、スポーツ面だけでなく教育面からのサポートも、現代に至るまで大会が継続されている要因なのがわかった。

2) 大学女子サッカーの発展のきっかけは、ドーランス氏たちの尽力で1982年創設された女子サッカーのチャンピオンシップだった。それ以前の1970年代は女子サッカー部がある大学は100あまりで横ばいだったが、大会を機に参加校数も登録人口数も増加した。

3) NCAA ではシーズン制や練習時間について細かい規定が徹底している。例えばアメリカンフットボールにおける過去の死亡事件や事故の経験から、選手を守る考えが徹底しており、これが女子サッカーはじめ女子競技者の安全や健康を守るために活かされている。このため、アメリカの大学女子サッカーではプロリーグと同等かそれ以上の環境が提供され、育成面での貢献があると考えられる。

4) 女子プロサッカーリーグは二度にわたる倒産や休止(WUSAが2003年、WPSが2011年)になり、継続的なリーグ運営が出来なかった。そのため試合や練習の機会を失った選手が多いにも関わらず、アメリカ代表には五輪やW杯に対して常に新しい選手を供給されてきた。そこには大学女子サッカーの貢献が大きく、若い新しい才能が次々と現れるのは大学側のリクルーティングや練習に対する取組みが考えられる。

5) ノースカロライナ大などはじめ現場を知る大学から、チャンピオンシップ運営の方法やルールの提案があり、全体の協議の中で幾つか採用されたことがわかった。それが大学女子サッカーで育成や強化の仕組みを確立することにつながった。

第5節 TitleIXの女子サッカーへの影響と今後の課題

ドーランス氏らへのインタビュー等から以下のことがわかった。

1) 1972年に制定された連邦法「Title IX(タイトル・ナイン)」(教育法第9篇または男女教育機会均等法)は、連邦政府から援助を受けている教育機関において、性に基づいた差別を禁止することが目的である。この法律の原則は以下の3つある。

- ①男女平等にスポーツに勤しむ機会を創出する。
- ②経済面の平等、すなわちスカラシップの分配、予算の配分など。
- ③スポーツを支えるハード・ソフト面の平等など。

日本では「TitleIX」の法律の中で①の面が多く伝えられるが、アメリカでは同時に②の部分も重要視されている。NCAAにおいて各大学に在籍する学生の男女比に比例して同じ割合の男女の体育会への所属率を達成することを義務づけている。また、石山(2008)の論文の記載にあるように、予算面でも同競技において男子部と女子部の部員数に応じた同じ予算の割当てが義務付けられている。つまり男女の生徒比率が60:40だった場合、体育会に所属する選手の割合も等しく60:40でなければならない。予算配分も同じ割合である。強豪チームで予算が潤沢にある男子サッカー部を持つUCLA女子サッカー部などが、豊富な予算を持つ背景には、このような理由があることがわかった。

2) 女子サッカーの場合、1990年にアラバマ州の大学で女子サッカーの創部においてこの法律が使われて予算を確保、後にこの方法が全米に広まった。他競技に遅れてはいたが、90年代はW杯や五輪の優勝もあり、NCAAの大学に急激に女子サッカー部が広まっていった。ただし、1990年以前も部数は増えており、そのきっかけは1982年のNCAA女子サッカー・チャンピオンシップ開催なのがあった。

3) NCAAでは「TitleIX」の運用や予算の割当てに細かい規定があり、それらが厳密に行われるため、各大学には予算の権限を持つ「アスレチック・デパートメント(AD)」とは別に「コンプライアンス・デパートメント」が存在し、常にADの活動を監視している。セクハラなどの行為を受けていないか、正しく「TitleIX」が運用されているかどうかは、この「コンプライアンス・デパートメント」がチェックしていることがわかった。逆にいえば、この部署が正しく機能していなと法律の運用に影響が出る場合もある。

4) 「TitleIX」によって女子スポーツ部が多く増えたが、現状の収支はほとんどが赤字である。多くのNCAAの大学においてアメリカンフットボールと男子バスケットボールの収益で、女子スポーツの赤字を補填しているのもわかった。また「TitleIX」を使って女子スポーツに予算が割当てられる反面、特に男子のマイナースポーツ、例えば陸上部や体操部、レスリング部が数多くの大学で廃部に追い込まれている現状も調査の過程でわかつ

た。図 4-3 に示したが、特にディビジョン I の変化が顕著で、1972 年から 2016 年までの 45 年間に 300 以上の男子スポーツ部が休部あるいは廃部となっている。また女子サッカーの強豪校であるフロリダ州立大など女子サッカー部しか存在しない。

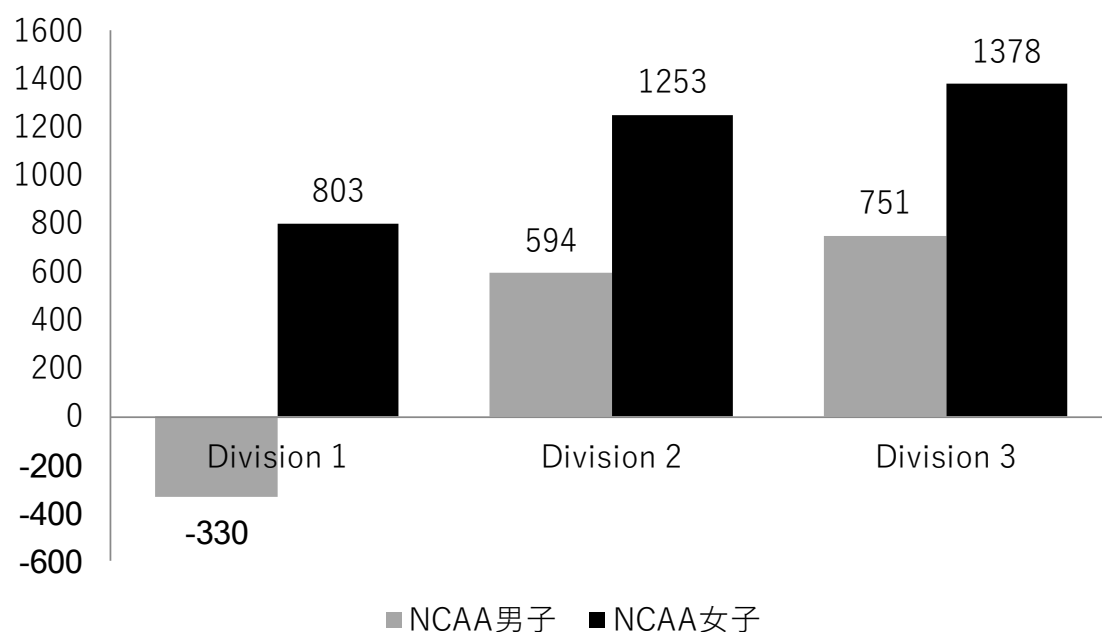


図 4-3 NCAA 大学全スポーツのチーム増加数と休部数(1972 年から 2016 年まで)

第5章 結論

本研究では、NCAAにおいて女子サッカーを正式種目として採用して、またその発展にノースカロライナ大学とドーランス氏が貢献し、アメリカの女子サッカー全体へ影響を与えたことが明らかとなった。

新しいリクルーティング法など幾つかの先駆的な取組みからチャンピオンシップ連覇を達成して、勝利がさらなる普及に繋がり新しい才能の発掘へ繋がるという好循環が生まれた。また、同大学出身の選手が五輪やW杯で活躍して勝利し、普及拡大や競技人口の増加に繋がり、アメリカ女子サッカー全体の牽引役になったといえる。

第6章 参考文献

- ・「The Man Watching: Anson Dorrance and the University of North Carolina Women's Soccer Dynasty」(2010) Tim Crothers
- ・「Training Soccer Champions」(2014) Anson Dorrance & Tim Nas
- ・「女子サッカーの日米比較研究(I)-アメリカ女子サッカーの歴史と現状について」-大阪教育大学紀要第 IV 部門, 教育科学, Vol. 51, No. 1:165-180. 東明有美, 入口豊, 山科花恵(2002)
- ・「女子サッカーの日米比較研究(II)-日本女子サッカーの歴史と現状について」-大阪教育大学紀要第 IV 部門, Vol. 51, No. 2:43-451. 2002. 東明有美, 入口豊, 山科花恵, 松原英輝(2002)
- ・「高校・大学における女子サッカーの発展に関する研究 -競技力と入試難易度の観点からの考察-」早稲田大学大学院スポーツ科学研究科修士論文、13-20P 石山 隆之(2008)
- ・「男子アルゼンチンバスケットボールの強化・育成に関する研究」早稲田大学大学院スポーツ科学研究科修士論文、東野智弥(2011)
- ・「「Title IX」が支えるスポーツの男女平等機会」 井上 洋一(2006)
- ・「TitleIX, Girls' Sports Participation, and Adult Female Physical Activity and Weight」Robert Kaestner, Xin Xu(2010)
- ・「A hostile environment for student defendants: Title IX and sexual assault on college campuses」Stephen Henrick(2013)
- ・ノースカロライナ大学/スポーツ関係 HP
<http://goheels.com/>
- ・ノースカロライナ大学女子サッカー部スタッツ表(1979)
http://static.unc.sidearmsports.com/custompages/Women's_Soccer/1979Stats.pdf
- ・NCAA 各大学ランキング記事/ビジネスインサイダーHP(2016)
<http://www.businessinsider.com/schools-most-revenue-college-sports-2016-10/#25-ucla--969-million-1>
- ・NCAA(全米大学体育協会)・各大学トラック競技における収入及び費用一覧/ESPN HP
<http://www.espn.com/ncaa/revenue>
- ・プラクティステスト/ NCAA の HP
<http://web1.ncaa.org/coachesTest/exec/practiceexam?division=1>

第7章 謝辞

本研究を行うにあたりまして、非常に多くの方々からの御協力やお力添えのお陰で完成させることができました。関わって下さった全ての方々に感謝の気持ちを表したいと思います。

論文執筆に際して、指導教員である平田竹男教授には本研究に対するアドバイスや助言はもちろんのこと、論文初期段階から研究テーマや論文作成の方法など様々な面で誠に親切な御指導を頂きました。教授の御指導に心より感謝の意を申し上げます。また、貴重な助言や示唆を頂きました副査の中村好男先生、児玉有子先生にも深く感謝を申し上げたいと思います。

そして、平田研究室社会人修士 12 期生の同期の皆様にも御支援を頂き、心より感謝しております。また修士 2 年制の河野遼兵氏、佐々木大氏、吉鹿奈三子氏にも多くの御協力を頂きましたこと、大変感謝しております。

本研究にあたり、インタビューや調査に御協力頂きました皆様に心から感謝しております。関係して下さったすべての方々の御健康と御発展を祈念して本稿を締めくくらせて頂きます。

付録：NCAA 大学女子サッカー関係者への質問表

Q 最近のノースカロライナ大の女子サッカーの取組みについてどういったものがあるかまた他の大学でどのような特徴的な取組みがあるか。

What are some of UNC women's soccer's initiatives as a program?

With regards to the trend of women's soccer in the U.S., is there anything in particular that can be differentiated between UNC's program and others, such as training, schedule, or other activities?

Q どのような経緯で現在のコーチの役職に就いたか。指導者育成ではどのようなメソッドや育成組織から学んだか。

How did you become the head coach for UNC? How did you learn your coaching method?

Q 現在のアメリカでは一般的に指導者はどのようにして育成されているか。また指導者のレベルをあげるために、継続的な取組みは何ですか。

Is there any development system to be a coach in the U.S.?

What kind of initiatives is there in the U.S. in order to improve the level of coaches?

Q 複数キャプテン制のメリットは何ですか。また、デメリットがあれば教えてください。

How many captains do you have on the team? If there are multiple, why did you adapt a co-captain system for the team?

If there are advantages/disadvantages, please let me know why you think so.

Q キャンプや合宿などの取組みはどのようになっていますか。

Do you have any training camps before or after the season? How do you decide where you go?

Q 地域の育成組織や街クラブとの交流はどのようになっていますか。

Are there any activities that the program participates in with the community in order to develop youth athletes?

Q リクルーティング(選手のスカウト)で全米ネットワークはどのように形成されていますか。またどういった基準で選手を採用していますか。

How do you recruit student athletes? Do you have any criteria for choosing them?

Q 毎年NCAAが行なっているスカウティングのテストについてどう思うか。

How do you think the assessment test in NCAA compliance for coaches who are able to do scouting?

Q 「TitleIX」は女性選手に機会均等を与えたと思うか。また、この法律が女性のカレッジスポーツ全体にどのような影響を与えたと思うか。

What do you think of the effects Title IX has had on equal rights to play collegiate sports for women in college?

How did it impact on the college sports for women as a whole in the U.S.?

Q 今後のキャリアをどのように積み上げていこうとお考えでしょうか。他の大学やチームからのヘッドハントはあるのでしょうか。

Could you please tell me about your career plan? Have you ever been offered a job with another university while working for UNC?

Q アメリカの大学女子サッカーが現在抱えている課題は何でしょうか?

What is a challenge for college women's soccer?